

特 11-

808

横櫛名情奥
横櫛浮話
柳葉亭

091546-000-0

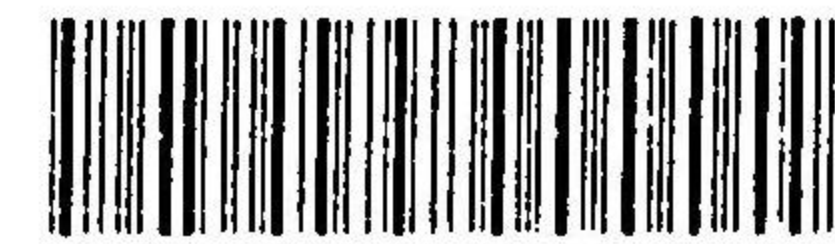
特 11-808

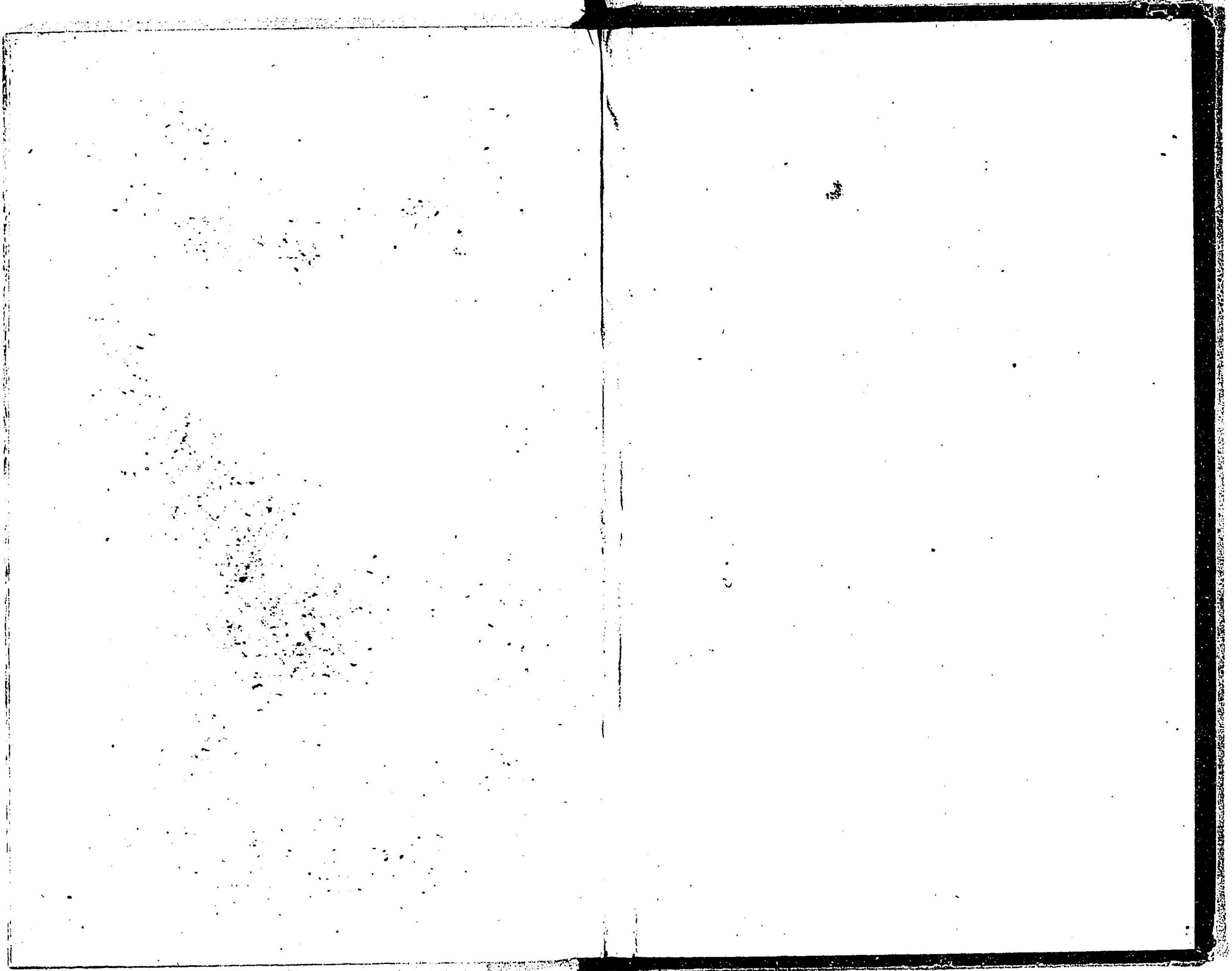
世者情浮名横櫛

柳葉亭 繁彦 / 著

M19

DBN-2536





明治十九年七月六日

世者情浮名板柳序詞

意氣よ造りし格子戸の門よまだる、柳葉亭紫彦ぬしが今

あな若くは迷はれたるお伽物の開けの芳る世者情粹なる浮名の

板柳とて劇場を演じるお富三郎の外題に其儘籍ると雖

も脚色の事實を詳細訂正し、斬麗を自ら梳直して、毛筋の垢

を清き拂ひ、地味だてがらを結び髪清潔出来た双紙あれば。

情傳てよ世に通りて、其評判の浮名高く、横柳の齒のひきも

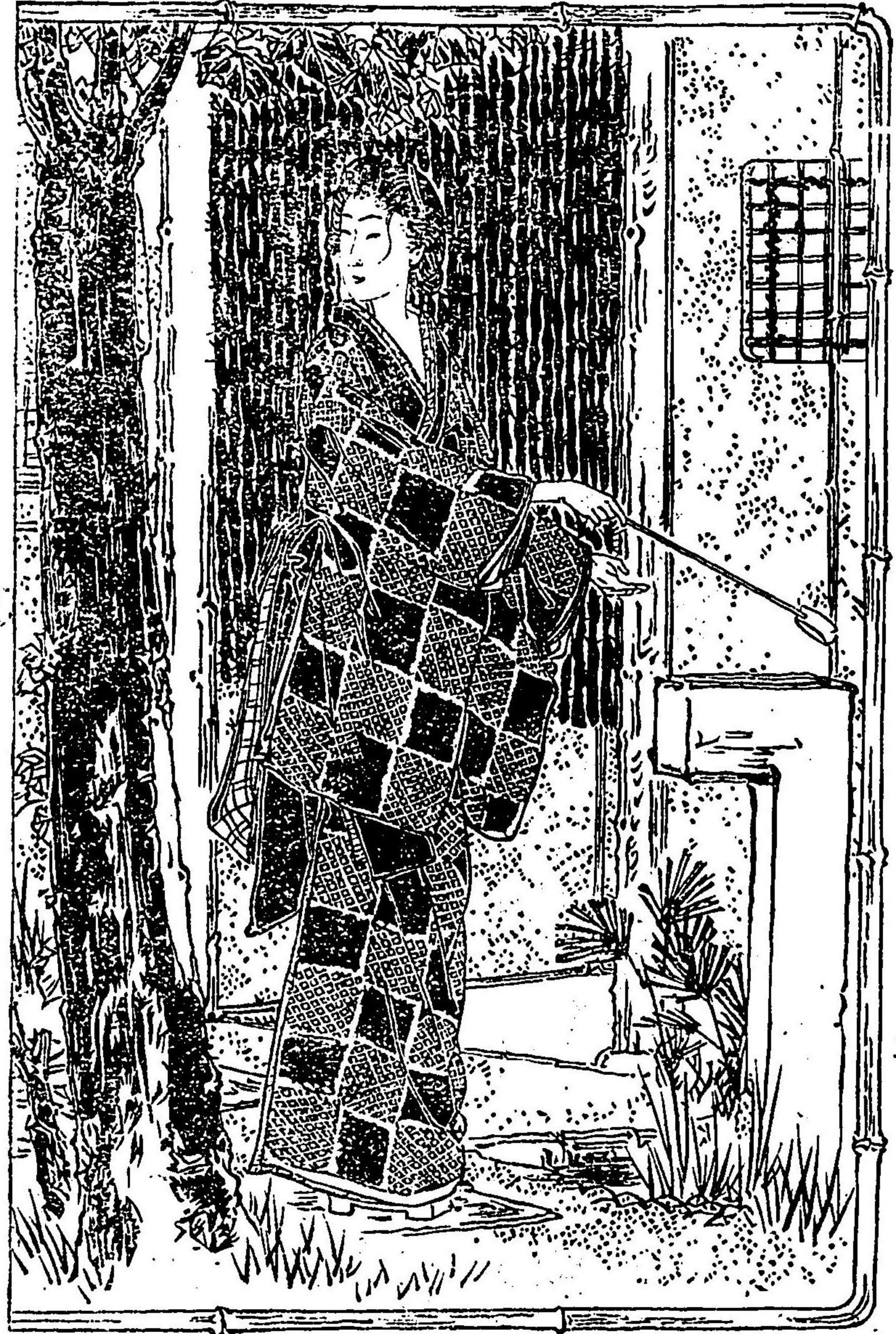
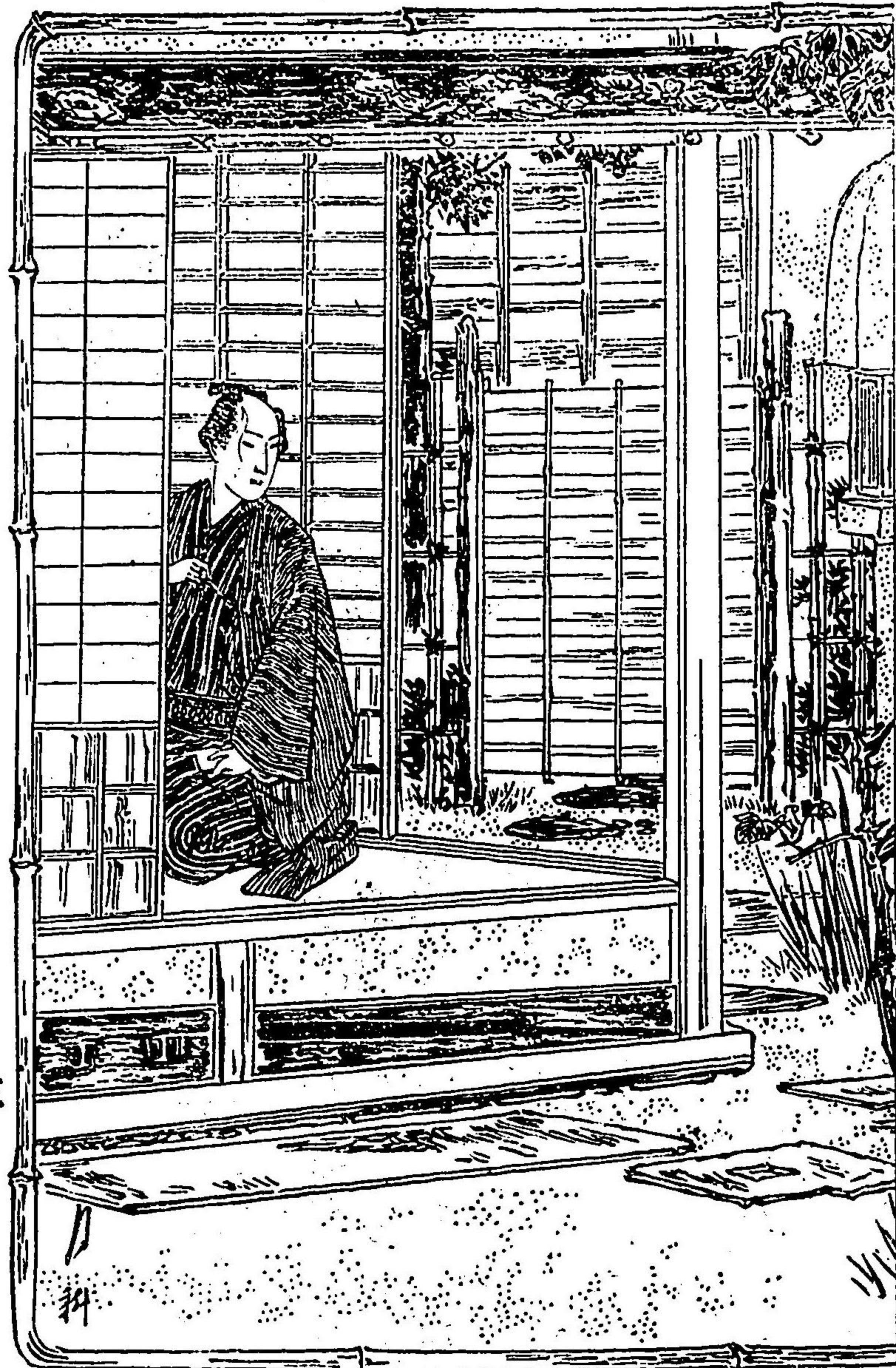
絶走に。看客舉つて茶を賜へし勤めに因ての序文せしも、編

蝠安の出て来る時刻、横くしと呼三日月に、洗髪てふ夕柳の。

同門の適れぬ其一條。

明治甲申中秋

柳淵亭藍江識



特 11
808

世者情浮名横櫛

○第一回

今者往昔徳川八代の將軍吉宗公の治世に當る享保年間の事とよ賢才の聞え高き町奉行大岡越前守の裁判に依て一件漸く落着せしむ富與三郎が身は關る因果應報の物語を聞くに其頃兩國横山町三丁目近江屋九右衛門と云ふ者ありけり身上極めて富家にして人も羨やむ身代あるが元來主個の九右衛門へ上總國木更津に些の田畑を所持せざる百姓某の忤と産れ濁々其日を營み居るうち齡廿二の春の頃同所へ聞へし豪商の或る大尽の獨娘が奈なる間も透見けん最悪からせ思ひ染忍びくくに玉章もて切ある心を通はする人木石も有ざれば九右衛門も亦胸打騒ぎ關隙を切り牆を越え逢ふ夜の數も重かりて離れ難き交情と成しよ早晚兩親の耳に入り兩個が中と裂んと爲しうバ痴情の迷ひ遣る方無く娘の父が貯置し黄金若干と持出し九右衛門諸共押送りの便船と頼みて江戸へ山知音の者と尋訪しうども今何地へ移轉せしや其行衛さへ分明せぬ頼む樹

五



新

四

の本雨漏りて最き露けき草枕爰さへ騷旅の心地して住果べくも思われぬが當時近江の
 湖水よ沿ふ某村よ九右衛門が稚き時よ分れたる叔父順念と云者ありて年來無沙汰よ
 打過ぎとれと素是道れぬ骨肉をかれバ親しき他人よ勝事有らんよ彼地よ行て左も右も身
 の方向と談合せんと娘と伴ひ九右衛門の東海道と心指し近江の國迄至しかバ文通の便
 りよ聞置たる叔父順念が庵室よ到着一別以來の口訢と述べ故郷と離れし始末を真虚
 打交て最哀れげよ物語るよ叔父も輒近病痾よ罹り翌日とも知れぬ容体なれば兩人の來
 しと打悦び汝等親の免許と受き密通爲して國と去り遠く此地へ呻吟來しハ世とも人を
 も憚らざる曲事なれと何事も年若ければ咎めへせじ心置なく滞留して行末とも定めよ
 と諭すよ兩個ハ涙ぐみ唯々ど計りよ承諾して是より茲よ脚を止め夫婦心と一ツにして
 叔父が病と介抱せし日凡そ二月過ざるうち叔父ハ空しくなりたるよぞ悲歎の涙よかき
 昏て近隣の人々と語らひ辛ふじて埋葬の事共法の如く執行ひ順念が遺言も有バとて
 九右衛門此庵室に附属せし品々と譲り受しよ古き藁籠の底の方よ小判五十兩貼付あり



八
しうは是の叔父が貯蓄の金ある可し今慮らるも此金と見付しからの浩る邊土は老朽ん
より再び大江戸は詣り然る可き商業と索め身の安堵と定めんと夫婦は旅装と調へ家
財残らば賣代をし遊るが如く彼地と發足て順禮を身と打扮ち恙がなく大江戸は着
せしうは横山町二丁目又細少ある家屋と借り受其日稼ぎの貧しき者へ高利と取りて貸
付し又九右衛門夫婦發達る時節もや有けん思ふも勝して收入能く二年有餘も千金程の
利潤と得しうは天よも昇る心地して同町三丁目見世藏つきの賣家と購ひ家名と近江
屋と改め最榮達て消光せし富貴よ他人集ると云里諺は波き娘が親も始めこそ立腹
もすれ今然る可き商人の女房と成し故いつと無く交通の便り杯して勘當とも免せし
うは九右衛門夫婦の悦び大方あら申すて光陰と經過りしが夫婦初老も近くある迄家と
譲る可き子供無きと歎き頻り又神佛も祈將せしうども露斗りも効驗なく今斯ふと思
ひ絶し又或者の從通も任せ傳馬町の邊に住む關良助と云醫師の藥劑と服用ひし然る
可き名藥ありけん妻の幾程も無く懷妊し月滿て玉の如き男子出生せしうは茲も多年の

愁眉と開き與三郎と號て鍾愛限り無く五十日百日の壽筵賑めしく物して此兒の成長と
樂しみけるが白駒の隙暫らくも滞在らるる與三郎疾や十八歳とあり心質正しく溫柔よし
て親も仕へ孝心深く殊も容貌の美麗ある事女兒も恥づべき艶色われは見ぬ戀も浮岩れ
て淫念も胸と惱ますも多かりしとぞ案下休憩此近江屋の同町内にて箱物問屋ある小松
屋丈右衛門の二子忠兵衛と云る者ありしが恰好與三郎と同年もて幼稚き時へ同じ師匠
の許も通ひ浪花津淺香山の學友ありしうは互ひも心底と打明して睦間敷交際り今も
折々往來して無二の友垣ありしが或日忠兵衛與三郎が方へ來り種々語り興せし序次
浩る好時節も閉籠てのみ過さん余りも本意無き事あれば心も風流も無くもあれ青葉
の蔭と逍遙なさは戀と慰む方便と爲んと云ふも此方も打微笑み能こそ思ひ立れたれ然
るは是より參らんと支度そこへ立出て墨堤へと急ぎゆく

○ 第二二回

九
恁て兩人の壯者の道々打興じつと疾くも墨堤も來りしに時は是卯月の始めされ昨日

まで咲亂れし花の梢も今日青葉の色と染め替へ又一段の風情あるよと思ひきも時刻
と遷し黄昏近く成しうは誘歸らんと諸共床机と離れ堤と下り竹屋の渡舟と向ふよ越
て山谷橋まで来りしとき忠兵衛筋うよ云るやう汚身と我儕の幼稚より物争ひせし事も
無く廿歳に近くある迄も猶十年の昔時の如く聊か隔てぬ交際あれども汚身も我儕も互
親の庭の教えの厳しき故只一回も同伴で物言ふ花の色里へ足踏み入し事無きと平素遺
憾に絶えざりしが今日幸ひに此所来し願ふに稀ある僥倖あるよ汚身は承諾玉の
是より直ぐは彼地よ到り兎も角もして妓樓に昇り遊蕩の道とも覺悟む可し汚身が了簡
奈にぞと教唆されて與三郎の意正しき者あれども生年茲は十八歳其氣の無きよも非ざ
れば耻かひしげよ打點頭學術も何事も我よの兄ある汚身の薦めに何とて異議の有る
可きや宜に計らひ玉のれよと微笑あがら答へしうは忠兵衛も又悦びつゝ然に迎直ぐよ
土手へいで後原投して赴むさしうは兩個の者へ是迄は遊里よ入し事無ければ遊女と買ふ
可き様子も知らず只彼所此所と彷徨て困じ果たる其所へ兩個の素振りよ目早く見認め

茶屋の男と思しき者よ小腰と屈めて袂と扣へ何樓へありと供せんよ先づ我方へ立寄
り玉へと他事無きさまよ誘ふと渡津に船の心地して兩個の兎角の言詞も無く彼が任意
曳れ行くよ紺の暖簾よ自拔きの文字も太く三扇と染抜家へ伴ひ入家内の者共散動て皆
とりくよ打囃す絳の形状蕩々しきよ兩個の貌と合しつゝ裡恥かしく思ふあるべし斯
くて當夜の江戸町壹丁目ある玉屋山三郎方へ到り與三郎の花扇忠兵衛の艶柳とて何れ
も傾國の姿色ある遊君と揚げ翠帳紅圍は枕と並べ雨の矢先よ雲の楯語らふ隙も夏の夜
の明るよ早き鶏聲よ驚起て立出ると今一服と袖曳て再會約束の私語必き忘れ玉ひそ
と云ふと後ろよ聞殘し我家へ急ぎ歸りしと之と始めよ兩個の者へ雨風雪の折とも云せ
日頃の品行と引換り廊通ひよ金錢と湯水の如く費せ共素より富豪の身代あれは然斗り
の事々共思ひき明暮遊蕩よ耽りしと或る後朝の早歸りに豫て馴染の山谷ある藤屋と云
る船宿より船よ打乗り漕出しよ折節南の風強く大川筋へ山たれ共船の次第よ吹戻さ
れ船頭權次も必至とあり一生懸命働けども些とも動かさ何時迄も一所と漕出ねは兩



十三



十二

個の大ひに打驚き恚て時刻と移しあば我家の首尾も悪かる可し去迎陸へ上る共別よ手
 段も有ざれば船頭權次と罵勵して此儘急ぐよ如きと思惟し忠兵衛態と聲荒らげ叱り付
 るに船頭の性得善らぬ者されば面脹して敦圀つゝ最前よりの難題も日頃最負の客筋ゆ
 ると胸と擦つて堪へて居たが餘りと云は無体を客人金の威光で仕へるゝ身の船頭の賤
 しい家業も落れば同じ谷川の水の上での一六勝負板子一枚其下の地獄を知つて取る掉
 の商買づくにも突切ぬ此大風と平時のやうに遣れど無理を客人たち斯云れるが嫌あ
 らばどうでも勝手に爲せへましと空嘯いて取合ねば一徹短慮の忠兵衛ゆゑ怒氣心頭よ
 り起りうち無禮の過言奇怪なりと立上りさま手に持し煙管と取つて打んと爲る中と擱
 へて與三郎がマア〜勘辨し玉へと頻りに留る袖振拂ひ權次へ打て懸りしうは權次も
 忽ち景容と變へ身構へなして立迎ふに此方の益々憤激して打んと爲しと躓きて倒るゝ
 機會に水底へ權と斗りに落入りて散も止め成りしにぞ救護術も涙ぐみ忙然として佇
 立たる與三と權次の見返りながら御覽の如く忠兵衛さまが非業の邊最期遂げられしも

中さば自業自得にて誰の咎でもござりませぬと余所より望めば若旦那(與三郎と云ふ)
 と爭論をされて落たる如くに見て居る者の無いとも云ねば今日の始末の押隠し任意各
 員が問れても知らぬと云が一分別身のお爲でござりませうと我が身は懼る罪科と他
 に譲りて身遁れと訂る意匠と知りしうは悪さも悪しと與三郎の景容と正して權次に向
 ひ然云ふ時の我方に罪ある如くに聞ゆれども元の起原の其方と忠兵衛どのとの葛藤に
 て我に關する事ならねば此趣きと悉皆忠兵衛どのの親御に話説すより外思案の無しと
 言ふに權次の目に角立て然仰有れば權次めと罪に陥して若旦那の邊れなざるゝ積り
 う知らねとちらもどうと定まらぬ別に證據の無い事されば恐るゝ事の少しも無し依
 つて尊公のお口と俟せ權次が是うら忠兵衛さまのお見世へ参り云々と一部始終と告げ
 まさうら云ひ分け有る證據と添へ其時充分仰有ませと云れて夫の口籠る與三と脅迫
 賺しつ兇漢が意に匠む悪事の遠謀言伏られて與三郎の黙然として差俯きぬ

強惡非道の權次が言葉に元來實直き與三郎の驚き呆れて暫らくの詞も出さ差俯き左右の應も非ざりしが綻疾や茲に及びし上の所詮此儘忠兵衛が親に告可き詞も無れば心あらきも漸く承諾兎角する間に風も止み舟の走りも自在と得て柳橋まで漕付たれば屢々權次と戒嚴めて必き口外致すと云ふに權次も黙頭て此日の事無く別れしと忠兵衛が親忠左衛門の浩る事との夢にも知らず家を出しまゝ忠兵衛の歸り來ぬのと不審に思ひ近江屋方と問合すれども與三郎さへ知れと言に術計盡て兩親の只事あらきと手に手と懸け目的と探索しう共行衛の絶て知れざりける嗚呼與三郎平常實直にして孝心厚く友愛の情他に越て忠兵衛と睦みしに奈なる天魔の所爲ありけん權次が策に乘られて好誼と断ち情と裂き知らぬ面持して消光し事無懸と言ふも魯うなれ案下休題船頭權次は此程慮らき忠兵衛が入水おしたる始末に付疾くも胸に悪事と工み與三郎とバ忍喝つけ強て悪事に引入おき筋うに己が榮利と謀り多くの金と奪へんと或日端無く與三郎方へ音信自個此頃仕合せ悪くて賻技の資本を失ひたれば些斗りの黄白借んとて参りたりと權

促が如く云ひ出るよ是の忠兵衛が狂死の砌り後ろ暗き事われバ夫故あらんと早くも悟り與三郎へ金取出し恵みしが是より日毎に入來り果の高聲は晉りて強て掠奪と爲よ與三郎も持餘し我家あら何と無く後ろ見らるる心地して筋うよ避て逢ざりしが打節親の命令にて小梅の里へ赴きし其歸途は川端のふ藏橋迄來りし時通り懸りて目敏く見認め權次は静かよ追跡り百本杭の淋しき處と行過んと爲後邊より前後と見廻し與三郎の袂と控へ聲振立這へ近江屋の若旦那好い所にて出逢たり頃日賭場の失敗がこみ身の方向の付ぬゆゑ少しの資本とを貰ひ中しよ毎日お見世へ出掛て行ご自個と懣懣思へるるう絶て逢ふても下さらねバ一層の腐れ何も角も親旦那打明てと懣懣し事の數回あらら人と殺した大罪の御身計りの事あらき我身も同じ一ツ穴大事遺へバ一生と無事よ經過る此首と滾りとやらねバ成ぬゆゑ虫と殺して抑制て居るが茲まで逢ひしハ意外洪福金を貸すとも薄暗ひ獄屋へ行とも二個一個否か可か生死の境ひ度胸を定めて應答せよと尻引捲り強面よ飽くまで根強く強奪かけ胸ぐら執つて離さぬよぞ猫も追るる鼠

十八
 の如く與三の顔色眞青に震へる足を踏固め言るゝ趣き心得られど懐輕き往還されば
 此儘妓の引分れ翌日の詰朝て我家へ來よ必き約と違へまじと畏く云ふと冷笑ひ權次
 の故意とけしきをみ品能く此場と遁れんと言を工みよ云ひ廻しても最ふ此上の腕づく
 よて是非懐中に在合す黄金の勿論衣類まで貸りて行から覺悟を爲よと力量に任せ與三
 郎を大地へ擡と推伏つ懐ろへ手と差入て引出さんと爲ところと誰共知らぬ浪人が何の
 間にうの佇立居て此現況と見て居しが腕差延し悪棍の權次が襟上引掴み喧嘩の意趣の
 知らねども此壯者が最前より言語と盡して陳謝るを耳も懸り理不盡に懐中へ手と差
 入しの人足稀ある足場と計り追剝夜盜を業と爲す兇賊あるうと云ひながら顔さし覗き
 打驚き汝の山谷の藤屋ある船頭權次又わらやと我名と指れ愕然とあし思ひき顔と打
 守りしが周章ふためき退糧人は執れし襟がみ引放ち一目散り逃んと爲しを後邊の方へ
 引戻し扇子を執て丁々と打拵あがら聲低語道理も暗き兇兒も我が顔と見て逃んと爲し
 の未だせめてもの見處あり汝は川事の澤山われは丹の唯汝と某と相對づくの私事



後日に延すも妨げ無れど此壯者も汝に對ひ膝を屈めて詫入よの必定譯ある事なる可く我大略の推せしかど奈に往來の稀あり迎爰よて議す可き事あらねば此場の葛藤を某へ預けて直よ立去ば我寛りよ商議を遂げ汝が志望を適へんが我が仲裁を承諾せ猶も無体よ脅迫して我意と張らんと爲すあらば我また別に分別あり覺悟究めて返答せよと荒肝挫ぐ退糧人が鋭き言語よ一句も出さしも殘忍無頼ある權次も遽かよ形容と改め尊命の趣き心得たり然らば此場の云々無く身よ預け立去るとも翌日の詰朝は横山町の近江屋方へ參らん程よ願ふの旦那の扱ひよて能ひる返事を俟ますと一體陳べて立上り與三郎とバ尻目よ懸け馳て其場を立去りけり

○第四回

跡見送りて浪人の急ぐのしげに言語を懸け與三郎の我儕と見忘れしやと云ふ此方も瞳と定め熱々見れば是の奈に先年我家へ出入して母よ藥りを與へる關長助よて有しうバ思ひ懸せと打驚き與三郎の面目無く忽ち顔を赤めしと長助僅りよ意中に悟り我儕

計らるも此場よ來り不思議よ身よ助けしハ遁れぬ縁故の有ゆゑあらん猶云ふ事も聞く雖も深山あれバ此方へ來ませと自ら與三郎の先よ立ち或る御茶家の奥まりよる静閑を坐敷へ打通り今日の始末の概略と最深切に詰問じにぞ持餘しよる強敵の權次と容易く追歸せし此長助が働きと嬉しく思へば我が胸よ深く包みし事共と遣らば打明け演述をし何とよ品能く權次めの手と切る工風ハ有まじきやと涙ぐみつゝ長助の補助と頻りに索めしうバ拱きし手と漸く開き長助前後と見廻して毒蛇又等しき悪漢が根強く御身よ貫線りて資金と掠奪る手段と知れば虚を斯て日と經過り若し其筋の耳よ入り御身諸共捕縛さば恣意御身が所業あらせども證據無れば分跡立き寔は危急存亡の一擧よ迫る大難なり然れども彼ハ往昔我よ受ざる恩義もあれバ一回厚く説得ささバ此以後御身へ迷惑とまゝ懸可しとも思ひねど素來不敵の兇兒ゆゑ其期よ及び運累の罪科と御身よ被らせなバ勞して効なきのみあらせ御身が上も最危ふし依つて某し手段と設け彼曲者と人知れせ切て捨るバ横難の御身よ貫線る事も無く殊よハ益なき破落者殺害爲すとも世の

中の助けよこそあれ害の無し遮莫好んで某が爲す可き事への有ざれども一ト方あらそ
 慈意よあしけ身の母御が汚身とバ擧げられしも某が治療の方らよ據りしとろ平素親汚
 も言ひ出られし汚身が一世の大難と豈其儘よ見過されんやと義と見て勇む任侠の關良
 助が深切ある詞よ左右の應答も無く暫し思案よ昏たれ共大事よ迫りし折と云ひ年さへ
 未だ廿歳よ足らそ思慮分別も定まらねバ與三郎の打點頭數もよ足らぬ僕と斯くまでお
 庇蔭下さること七世の生と換るとも何とて忘失奉らん宜よ計らせ玉の可しと屹然と
 の云へぞ我ちが空恐ろしと思ふの自然と面貌よ表るるを猶良助の膝押進め聞れし
 如く權次めが翌日の必せお見世よ至り我が挨拶と兼て亦望み懸るる金子をバ汚身よ督
 促りし其時よ親掛りある身の上ゆゑ多くの金の整へぬと親類方へ打歎き渾能く才覺爲
 とされバ一所よ來よと欺むきて時刻と計り汚陣が原の淋しき處へ引出されおバ汚身が
 爲よ愛ひを除き日來の好誼よ報ふ可し然れ共彼と殺害おし御身も我も此地よ居らバ遂
 よ露顯の端とあり心盡しも書餅とあらん故よ汚身其場より何れへあり共立越える心

搦へど簡要あり然し件んの趣きと親御の耳へ入置おバ只徒らに苦勞と増する不孝の上
 の不孝おれバ始め終りと具よ告げ免許を受けて其後ちよ此地を去バ親汚の勿論汚身の
 爲萬事都合よ成よし有んと事遺漏も無き良助が思案の極意と與三郎の悦び承て手筈と
 定め袂を分ちて歸りし其夜竊りよ兩親の臥房よ赴き此程芳原の朝歸りよ忠兵衛と兩
 人山谷の藤屋より大川筋へ乗出せしとき怒りよ任せ忠兵衛が船頭權次と打んとし誤ま
 つて自ら入水せし事より權次の進めよ浮と乗り忠兵衛が踪跡と知らせと云張り權次が
 見世よ來り合力と乞ひ利へ今日百本杭よて出逢ひ既よ懐中の金子と奪はれんと爲し處
 へ慮らちも關良助の爲よ危難と救はれし事よと浩る悪人の始終前縁居る時其身の爲
 悪しければ欺きて差殺し災ひの根と立んと云ひし事共まで遣らそ物語り身の不埒ある
 舉動と打詫び暫時が間だ遠く其身と避ん事を余義なく陳べしうバ兩親の只顔見合せ餘
 りの事よ呆れはて太息吐きてぞ居たりけり

○ 第五回



借も悪漢船頭權次に向ふ兩國百本杭にて慮らざるも與三郎は出逢ひしうべ之幸ひと強
 面は彼が懐中せし金子と掠奪せんと爲し處へ關良助の爲は遂は本望を達する事能はぬ
 最口惜く遺憾く思ひしう共奈よせん此良助が庇蔭は因り幾日は危ふき大難を免がれ
 る事有しと以て強く抵觸ふ可詞もなく阿容くとして立別しが遮莫今日こそ近江
 屋の市盛は到り與三郎と切らし志望懸けたる黄金と奪ひ取んとて其朝疾く我が住む家
 といで横山町へ來りしう先づ取敢き近江屋の市盛は到るに與三郎の斯くと見るより
 面貌と和らげ屢々後邊と振返りて借約束の金のこと種々工風と凝らせしかど素より御
 身も知る如く未だ部屋住の身の上ゆゑ少しの間は多分の黄金の出来やう筈も内々よて
 我が眞實の叔母あれば之は便りて談合せしは是迄黄金の事杯にて苦勞を懸しこと無れ
 ば云ふがまに承諾て黄昏までには五拾兩我儕へ貸して呉ると云ふうまい都合は運
 びしあれは定めて御身も俟遠ならんが今日夕方まで期と延し我儕と俱は飯田町の叔母
 の家まで同道して黄金請取りて給はらざるや然らば御身の志望も濟み我も一ト肩荷と下

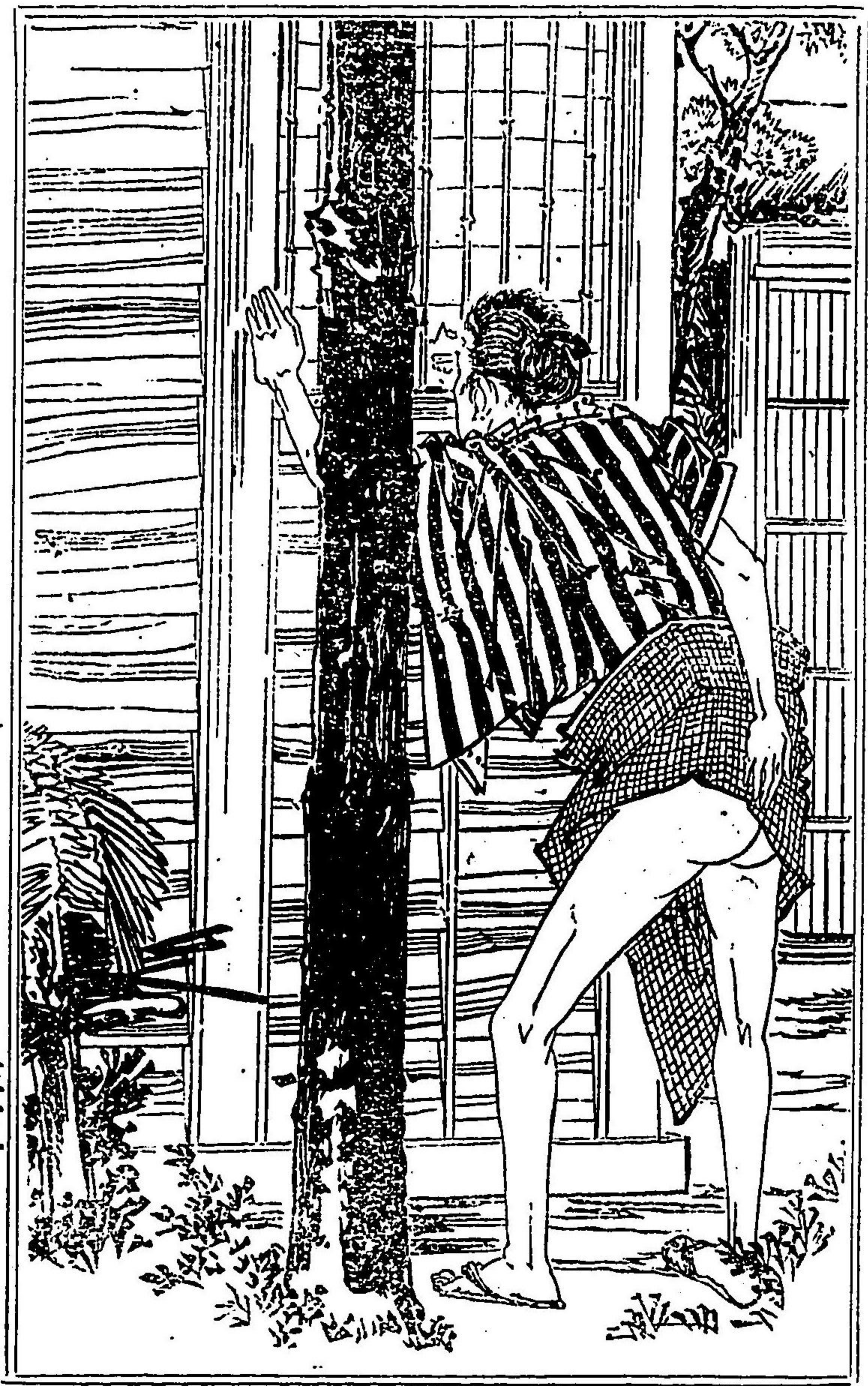
す互ひの爲は此上幸ひ此義の奈にと眞實立て教へられたる其通りと述るは權次の偽謀
 との聊か心も着ざれば洗々ながら請引て少しも俟ぬ筋あれども其様都合のある事あら
 ば开を彼是と云ふよりの滑く奈にも俟つ可ければ夕方再び來りし時猶左よ右と詞と盡
 し重ねて猶豫と仰有つても最ふ勘辨の仕ませぬから必き違約の無いやうは何分お頼み
 申しますと堅く約して立歸る跡は獨り與三郎が事成就との思へ共流石に物の恐ろし
 ければ直ぐ兩親の前へ行き權次が來りし始末を告げ黄昏再度來りさば僕彼を伴さひ
 て御陣が原は召連ゆき長助ぬしより好やうは今回の始末を埒明て貰ふ積りの心得なご
 ら晴夕も既に告し如く殊に依たら其場より一旦影を隠さねばならぬ場合にあらんも知
 れせ恐れば自個此儘に歸り來らぬ事有りとも必き氣支ひ玉ふなど云ふは九右衛門夫婦
 の者へ最愛事に思へ共差當りたる工風も有ねば用意の金子を取出し我が故郷ある何某
 方へ暫く問與三郎を隠匿具よと懇ろに書認めし依頼狀着替の衣服も取添さながら彼地よ
 至らば猶更に其身を護し再び亦親も苦勞を懸さずと涙さぐらに説き示し筋かに支

度を調理させ權次の來るを俟うちに疾くも中下刻と成れば權次の急しく入來り筋と斗りに促すまぞ此方も覺悟の事なれば然有ぬ休ま出迎へ打運立て立出しが事よ托して隙入させ陣が原へ來りし頃誰か彼かの王魔が時人脱さへも分明ぬを是儀侍と長助の木立の間と廻り山權次と與三を遣り過し背後より聲とも懸せ權次の肩先切下げる腕の覺への一刀流又も勝れし業物なれば何かの溜らん呀苦一聲叫びしまふ腕くも思へ絶たる容子と篤と見濟し與三郎に疾く一茲と落延びよと思もて頻りに教ふるにぞ與三の慄へる足踏しめ禮云ふ裡も氣の急バ兵手を合せ伏拜み上總路指して落行きけり(關長助が事此下に話説無し斯)て與三郎の其夜直ぐに靈岸嶋に至り夜舟に乗じて木更津へ着せしかバ豫て兩親より教へられし相屋源右衛門方へ赴き彼一通を差出せしに主個の甚だ訝かしみ首尾を讀見るに只放蕩を懲らす爲め地へ暫く留置て教へ導き玉へる可しと書きたる而已よて今回の變事の聊か書載ねど若淡よ有うちある深く咎むる事成を迎最快く承解せしにぞ與三も僅ろよ心と安んじ茲は月日と經過うち疾其年

も暮行て翌年水無月中浣に成しが元來當所杉林明神と云郷社有つて毎年六月十五日が大祭なれば近在より老若男女群來り土地珍ら敷賑ひひと是も江戸への話説種に見物をして行玉へと和屋の手代仙助が勤めを幸ひ與三郎の伴はれつゝ其所此所と見廻り果て花屋と云ふ江戸料理屋の樓へ上り浮世話をとりませめて兩人酒を酌代し笑ひ興じてゐるうちに剛へ立し仙助が笑片まけて坐敷へ戻り酒の伊丹の最上品肴の高味と排列る共酒宴の席に女が無て事の足ぬを苦に病しに思ひ懸き美人は逢ひぬ開の豫より僕がふ嘶し申せし木更津は二人とい無き婀娜者よて以前の此地の藝者でありしが今い處の親分株赤岡が妾のお富と云ふ者幸ひ此樓よ來合せ居て不思議な面會致せしうバ久しぶりある此山合一寸一盃進呈たいから坐敷へどうか來て呉よと約束なして参りし故退附け茲へ参りませうと鼻蓋かし説き誇る彼方の抜戸押明てお免しおされと云ひあぐらお富が坐敷へ來りしにぞ酒宴も殊に花やぎけり

○第六回

和漢を問せ古今を論ぜ名將勇士と雖も美女の爲に身命と拗ち或は醜名を末世に傳ふる者母あからせ況んや凡人とや與三郎の慮らそも赤間が妾の富と一坐し互ひに捨難き思ひ有て此日の其儘別れしう共戀慕の情須臾も止まらせ終に密會を遂げ割無き交情と成しかば人目の關の繁きを啣ち飽ぬ別れの難と恨み水洩さじと契りしと知る者絶て有らざりしと爰に源左衛門が乾兒に觀目の三吉と云者奈にして聞出しけん富が與三郎を引入れて濫りがはしき舉動あるを源左衛門に告げたりしかば赤間の強く憤り姦婦奸夫を切害して受たる恥辱を雪ぐんと乾兒の者へ手段を申し事又托して我家と立出時刻の來ると俟居るとの聊か知らねば彼が富の平時の如く與三郎を誘りよ招き諸共枕と並べて打臥したるが其夜も既より更闌て子刻の鐘聞ゆる折節源左衛門の乾兒を引連れ我家の前後を押取巻裏より籠入しに兩個の怖忙て露顯せしぞと思ひしかば富の手早く行燈の燈と弗と吹消しつゝ索窺かぐら様頬を巡りて庭の木立に隠れ息と殺して忍び居るとも知らざれば源左衛門の乾兒に下知して奥深く其邊隈をく搜索するうち戸



惑ひおして逃後れし與三と目鋭く見認めしうバ走り懸りて腕捻上げ荒細取つて控し上
 げ先づ登人の生捕たり者共富と逃すると云ふ聲聞て打聲き疾や是れと思ひしうバ
 富の堀に手懸けて閃りと外へ飛び踰えく裾端折て一散り濱邊の方へ逃げ出せば乾
 兒の觀目ダ散りと見付け點頭あがら跡追ひ懸け帶際取つて引戻を女あがらも一生
 懸命力と究めて振離し逃れ難しと思ひしかバ逆巻派身を躍らせ派とヨリ飛入しかバ
 觀目の頻り足招爲れを仕方無れバ寸返り富ダ入水を告しよを源左衛門の最どしく
 怒れる顔色朱を瀼瀼捕獲置し與三郎と椽類近く引据させ富と不義せし事情と糺し一
 刀すらりと引抜て面部手足の分ち無く七十五ヶ所弄斬是よて少しの胸暗れたり噴引導
 と渡して吳んと再び刀を取り直し息の根留んと爲したるを觀目の慌て押し止め源左衛門
 一耳打おし親方自身殺さずとも此儘於ても死ぬ命迎もの事相屋へ持込み始末と演述
 て巨大と掠奪出さバ殺すよの雲泥は勝たる大金儲けと云ふは双手と碯と打ち源左衛門
 の微笑あがら道ダ一二の乾兒だけ其所人注意の就たの近頃以て感心したり然らバ持



込む川意を爲よと乾兒に分擔新菰へ息も絶げよ苦しみ居る興三郎とバ押包み夜明けと俟ちて赤間の乾兒觀目と先に三四人が相屋の見せへ居り込み此荒菰へ包んだら大事の品ゆゑ此見世うら百兩貸してお呉ませへと動かと坐して動かぬにぞ主個の眉と皺めつと訝りあぐら荒菰を捲り上れば是の奈に預り者の興三郎が朱に染りて片息に蠢き居るよぞ打驚き餘りの事に言葉も出ぬを觀目ハ然こそと冷笑ひ人も有ふに木更津で親分株の源左衛門が二世を懸けたる戀女房と盗んだ科で眞此如く五体に受し疵物あぐら此方の家への大切を預り品と聞たゆゑ擔ぎ込だる質種に千兩と云ふ直打の有れを相手の女が八月を俟せ此濱邊から大海へ流れ又出たので品物は不足が立たを勘辨して負て措くから源右衛門ごん否可無しに出しませへと悪事よ強き破落戸が不敵の所望よ立腹すれ共分疏可き辭柄も無れば懸て百兩取出し後日は苦情無いと云ふ證書を受取り彼等に遞與へ興三郎をバ引取りしご恠て措可き緯あらねバ件んの趣き云々と兩親方へ報道せ良習と聘して療養せしよ未だ運命の盡きざるよやさしもの疵所も漸次よ癒へ半月余り經

過うちに痕こそ残れ文体の活動に苦痛の色も見えざれば源右衛門ハ懇ろに猶將來と誠しめつゝ親九右衛門の名代に疾くより來りし伴頭の喜兵衛と共横山町の近江屋方へ出立させはつと一息吐きとりとぞ(相屋源右衛門が事此下に話説をし)

○第七回

近江屋の一子興三郎ハ伴頭喜兵衛に伴なれ我家に歸り來されども身の過まり又兩親へ面と合すも面目無れバ只管其身と謹しみて専ら療養をしうら翌年陸月の初浣に全く癒し悦びと久敷家よ引籠りし戀と聊か慰さめんと十二日の黄昏から頭巾眞深よ打冠り横山町と立出て茅場町ある藥師よ詣で處せきまで排列たる植木の見世と彼所此所と漫ろよ見歩行く我が先へ廿一二の艶麗ある豈人の婦人が下婢らしき少女と共是も亦植木の見世と素見あぐら笑ひ興じて行き過ると心とも無く見認めバ紛ふ方無きお富ゆゑ若しや肚裏の迷ひかと夫とのあしよ窺ひ寄り面と深く包みしと幸ひよして右見左見よ愈々お富ありしかバ偕ハ赤間よ追れし時海よ其身と沈めしと衆口よ聞しハ空事よ

て此地に追れ来りしよや身と投げさるるの實事よて救ひ上られ故郷ある此大江戸へ来りしか問ふ可き事も云ふ事も巨多有り執愛く我も有る従ひゆき堀江町まで到りしよ家の左まで廣潤からねと賣白よありせし普請の光景間でも知るき富裕の者の外妾と住する家と見受し一ト携へ彼兩人が運入しよぞ手に持つ珠と落せし如く忙然として佇立居りしが居所と確と見置しうへの竊かよ訊問て面會する時節も有んと點頭つゝ元來し道へ引返さんと爲し折しも年齢廿八九と覺しき漢が身よ汚穢き弊衣と着し手に聊かの錢と持ち此家の門に立ちながら這入らんとして幾度も與三郎と見返るよぞ此奴よ間々懸幕ふお富が現今の身の上と聞出さん事安かる可しと意中よ疾くも思ひしかば與三の忽と聲懸けながら何處の人よ知らざれども些折入て頼みたき次第も有れば我等と共よ何樓ぞで一盃酌む氣の無いと言ふよ漢の小腰と屈め汚覽の如き我々風情へ何の汚川も存じませぬぞ立派な旦那のお頼みとい一圓合點が参りませぬぞ仰せよ従ひ伺ひませしやうと最無造作に承諾にぞ與三の悦び打連だち近所の酒樓へ押上り頻り酒と物



めしかバ事由の知らぬ彼男の勸むる猪口と手を取り上げ思ひ懸け無き涉馳走よて疾
 や七八分酔ひたれ共涉用の筋が肚裏に罹り安堵ませぬ何事まれマア仰有て下さいま
 せと言ふに然こそと與三郎の膝押進め聲低語今の何とか包蔵可き我の兩國横山町を
 る或る商人の一人あるが商賈づくの手違ひより暫らく故郷と跡にして上總邊りと漂泊
 しが此頃漸く返り來つ今日慮らざるも縁日にて見懸し女其以前我に少し義理のゐる
 逆れぬ交情の女故現今何して居る事と跡も付つて従ひ來て彼處の家へ這入しまで
 の慥かに夫と見届けしが年來搜索る者なるか或ひ他人の空似かと胸一つで定め兼
 ね思案に昏し其處へ貴公が見えし意外の好機女の名前の上と包ませ我へ明しな
 我夫程の酬ひと爲んに具は致へ玉われと言れて漢の頭と搔き奈ある事かと思ひの外容
 易き旦那の涉依頼ながら不斷出入と爲るのみよて女の名前の上の委しい事存じま
 せぬと何んでも大家の伴頭さんが持物よして居るとの事火伍の奴輩の噂と爲ると
 疾から聞て居りましたと言ふに此方の去氣無く女の名前其外と涉身が知らぬと言ふ

からの別に何と工風をして彼所に到り余所をぐる女顔と見定めたいが何んどう思
 案の有まいいと與三が余義無き詞のうちに漢の莞爾打笑ひ夫よ斯ふ云手筈よして私
 共の火伍と見せ懸け金比羅詣の草鞋錢と無心ながら入籠んで實否とを糺し成れませ
 と言ふよ此方の大ひは歡こび漢と共に酒樓と立山形装と扮且して堀江町のお富が家へ
 赴きけり

○第八回

恁て以前の兩人の程無く来るお富が家の格子を叩て内に入り私共は近所に年來住
 ます者あるが今回讀岐の金比羅へ参詣致すに就きましての寔は恐れ入ります多しよ
 限らず草鞋錢とも惠興成れて下さいましと言ふに再々かと取次の下女の溢々奥へ入り
 烏目百文益も載せ兩人の前へ指出すと見願もやらせ彼男の一層聲を張上げてお志しの
 草鞋錢彼是言ふでござりませんが兩個の中へ百文との餘り輕蔑下され物先方が先方
 さら拾六文でも無言で貰つて歸りますが年中お瀧總仕たい三昧言ふ目の出る此方

の家へ来たからハ端錢でハ歸られぬへと盆と其まゝ投返す聲聞付ても富ハ立出女斗り
 と侮どつて大きな聲とカ立だぐ其様古手な強面ハ驚くようち了箇でハ斯ふ云ふ土地に
 ハ居られぬ等夫で不足に思ふから勝手におしよと言込て奥へ入らんと爲る折しも富
 と茲ハ圍ひ置く主個傳兵衛入來り始終と聞て懐中より小判一枚取出し是ハ寔に輕少ガ
 持つて往奇と投出され當初の虚勢引換えて謝禮もそこゝ立上る漢と主個ハ暫しと呼
 留めお主ハ左官の吉五郎未だ根生ガ治らぬかと言れて驚く彼漢ハ主個の顔を打詠め然
 ふいふ尊公ハ大松屋の伴頭さんの傳兵衛さま然ち茲ハ旦那のお家カ面目無いと蹴蹴
 只簡説て逃るガ如く兩個ハ狐鼠々外へ出ほつと一息吉五郎ハ與三の袂と静と奥飛んだ
 處へ邪魔ガ入り折角仕組んだ狂言の的ハ何やら外れたガ女ハ目的ハ就きましたらと云
 ふに點頭與三郎故意氣の無い面待して顔形容から言吾まで少しも替りの無いやうだ
 自個ガ尋る女と違ひ全く他人の空似よて可憎お主へ骨折せたと云ひつゝ些の小粒と與
 へ頭を搔きて氣の毒がる吉五郎別れて與三郎ハ我家の方へ歸りしハ富の所在の知れし



と悦び翌日時刻と推計り筋うよ彼所に赴きてお富も面會仕たしと云へど面部斗りよ拾三ヶ所も太刀疵の有る異形の人柄お富の不審晴やらねど何やら肚裏も覺の有る形容と物云ひに萬一やと思へば聲低語貴公の何誰でございますと云ふ顔熱々打守り見忘るゝのも無理あらざ別れて茲も三年越危ふい生命と助りて今此地も歸れども赤間の爲も七拾五ヶ所見らるゝ如き太刀疵うけ以前替る姿とあれど何んの因果か片時も忘るゝ問あき和女の事嗜昔慮らき茅場町で見懸し時の飛び立如く直ぐも逢つて年月の愛とも語り諸共慰さむ便宜も有ふかと慄慄お富も木更津まで海へ飛入り死んだと云和女が生て居やうとも思ひ懸けねを跡を付け慥しかよ見認めて訊訪て來た能マア無事居て呉たと云ふ顔お富も打詠め借のお前近江屋の云ひ懸け與へ振返り物を云き手と取つて坐敷へ通し坐よ着せ下女のお鍋と手元へ呼び平日和女に云ふて有る此客人の妾の弟是から度々來る筈ゆゑ籠相の無いよう氣と付けやと幾らか包んで與へしハ兩個が交情を口止めさする鼻薬りとぞ知られけり恠てお富と與三郎の久しぶり

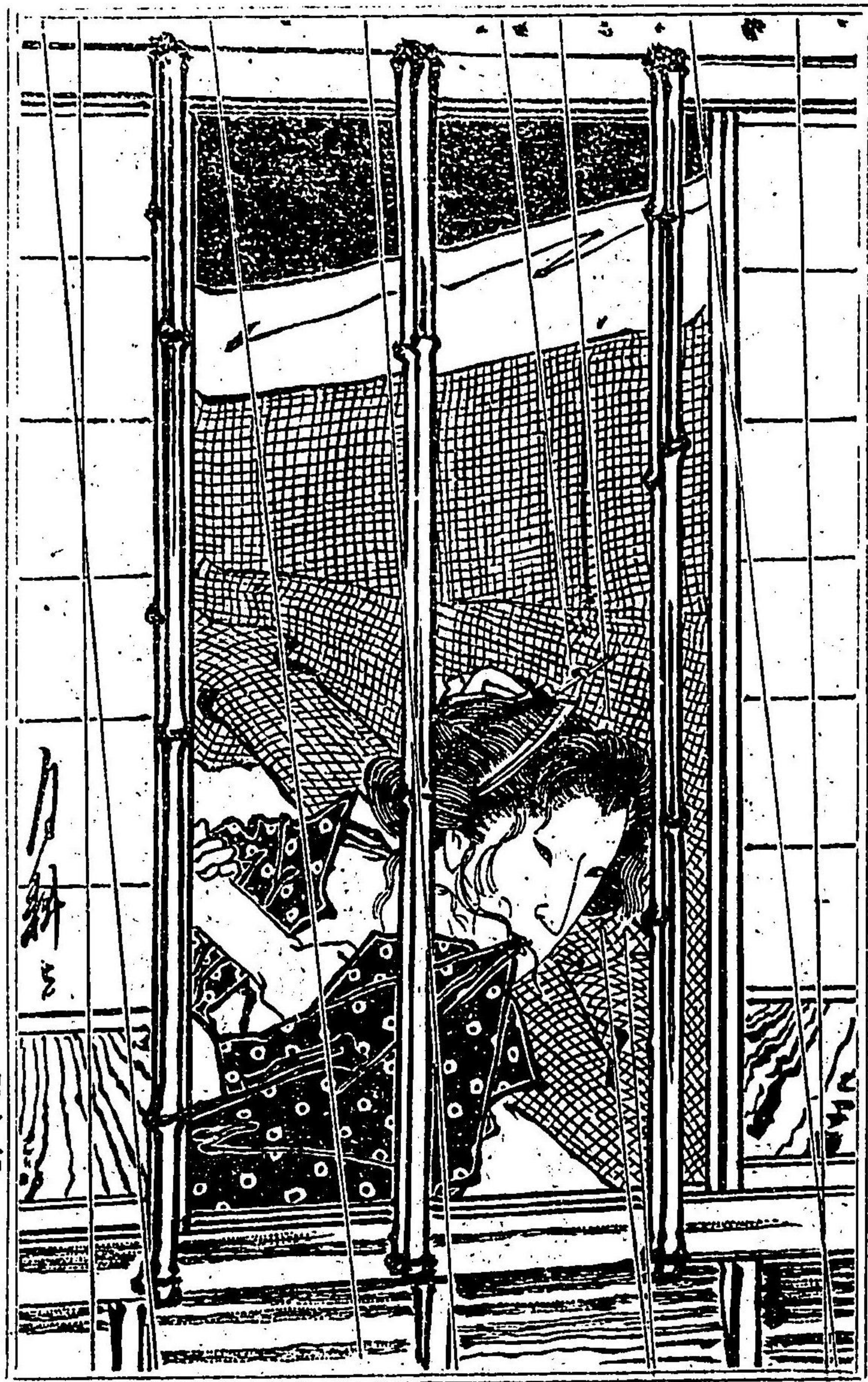
なる密會よお富の船よて助けられ故郷へ歸りし始末と話説し再び離れぬ交情とあり人目と忍び逢引して不義の快樂も耽りしを誰知るまじと思ふうち左官の吉が何の間に窺ひ知つてり大松屋の傳兵衛方へ告知らせしよぞ然る悪足の有る者から後日の事も氣支ひありとて遠が大家の支配を爲る傳兵衛あれは是迄の家作と共拾兩の金とお富も恵んでやり体能く暇もありしうば姦夫奸婦は是非も無く件んの家と人手も渡し柳橋の片邊りよ細少家を借受て爲す事も無く兩人が一日々と経過うち貯へて迎も有らざれば善らぬ事よハ馴安く賭博の群よ入たるが遂ひにハ全治らぬ宿痾とあり大家も生れし與三郎が昔しよ替る不身持と親も見限り勘當の寄邊無き身とありお富も猶も迷ひの夢醒きお富と共千般の悪事と匠むが功者ゆゑ誰言ふと無く向ふ疵の與三郎と異名とつげ人も畏るゝ悪黨と成り濟しよと身の榮に愈々無頼と究めし何して知りしか吉五郎が涉陣ヶ原の人殺しハ此與三郎が所業と人よ嘶して居たと聞き是ハ身の上の一大事生てハ措じと出又庖丁を懷中にして吉五郎を欺き賺しつ稲間堀の淋しい處へ引出し牌

腹を自懸けてグサと突く重傷の受ても丈夫の悪者吉の頻りよ聲振立人殺しよと叫くを
バ聲立させじと追ひ詰く挑争ふ其處へ提灯持て來懸りたる一人の女が明りを吹消
し忽ち吉と抱留めて疾くくと促すに幫助を得たる與三郎躍り懸つて切り倒ふし雲よ
り現る月影に顔見合せて打驚き和女の富と云ふ口を我と押へて兩人の顔面合ひつゝ
立去りけり

○第九回

水の方圓の器に隨ひ人の善惡の友に依ると宜あるか近江屋の與三郎の善らぬ友に交
際するより益々非道の舉動多く強借騙詐と業として淫酒に心を奪はれしかば勘當受しと
好機よお富と俱よ柳橋の家を自個が住居と成し爲す事も無く日を經過るに前胸も既
に云ふ如く左官の吉が舊惡を知つて居るとの噂と聞き稻間堀にて殺害あし疾や此上の
大丈夫と兩個の世間も忌憚らき遊蕩して居りしが與三も近頃仕合悪く賭博の資本を
消失しかばお富と筋うよ云ひ合せ千般工風と凝らすうち或日驟りの夕立よ往來の諸人

の奔走爲すとお富の窓より觀て居しに何れの藩の武士にや形装も立派を壹人の漢が最
困じたる顔付しつ我が軒下よ佇立居て空打仰ぎ眩き居るにぞお富の忽ち聲と懸け何員
さまか存じませぬが驟かの雨よお出逢ひあされ嘸涉難義でござりませう寔とよ汚穢
い家おがら其所にてお凌ぎ成るゝより少しの優しかと存じますれば心配無くマ一此
方へと云れて彼方の武士の振顧みて會釋しつは親切ある其お詞ハ兩具も携帶で難澁致
せば貴命に従ひ暫時の間涉様の端と拜借せんと言つゝ門より這入りしがお富の外よの
人影も見えぬに聊か遠慮して躊躇するとお富の視察只今母が廣小路へ用足しよ出た留
守中おがら追付け歸宅よ問だも無くは遠慮遊バす者も無き母子武人の詫住居お心置無
くサア此方へと強で坐敷へ乞昇せ先づ籠茶一ツと薦めたる如才内義が愛敬に彼武士の
打悦び思ひぬ雨が縁とあり斯く涉造作に預るのみか涉叮嚀ある款待ぶりの却て痛み入
ますれば打置玉へと挨拶して煙草薫らせ四方山の浮世雜談よ時遷り申下刻よありたれ
共雨の益々烈しくかり其上雷さへ鳴轟くにぞお富の故意と顔色うへ嘶しに托して武士



の側へ段々摺寄るとき近邊りへ落雷せしう一聲動と響きしかバアレーと言ひつゝ武士の肢体へ確と抱き付き齒と切り悶絶するも武士の驚き介抱爲ながら熱々見るも何一つ言ひ分の無き艶麗さよ俄然起る煩惱心寶の山よ入あぐら空しく爲んも残念ありと氣と失ひしお富とバ其所へ臥しめ思ひの儘よ強姦をして一息吐き立上らんと爲る處へ間男見付けさ動くかと呼はりあぐら與三郎の格子戸がらりと引明けて這入ると其儘武士の胸ぐら無手と驚掴み「何處の野郎う知らさいが誰よ示談り此家よ入り其上自個の女房が氣絶せしとバ幸ひよ飽くまで荒姦み其儘よ立歸らんとり武士よ似合ぬ比興を舉動最ふ勘忍が成ねへぞと拳と上げて打懸るも偕の夫婦が言ひ合せて色よ事托せ筒持せの黄白と掠奪る意匠かと思ふ物から我も亦犯せし罪と目前よ見られし上の何様よ分疏爲る共詮無しと疾も胸よ思案と定め只箇陳謝て懷中より黄白拾兩を取出し是の聊りの物あぐら暫時が裡でも此方の家よて暗間を待し返禮あり是よて勘辨爲て呉よど其所へ並べて支度を調へ慌忙めき門を出行衛も知れ成りしうバ跡見送りて與三郎の莞爾と打

笑みお富又向ひ「長ひ時間の狂言ゆゑ随分骨が折たらうと言れてお富の目と見開き疵掻き撫て起上り什麼お前の爲と云へ何處の奴だか知れない者へ身体を任せて自由にあり氣絶の振りを爲て居たのの余程慘苦事だつたと言ふも然こそと與三郎の件んの黄金をお富に見せ是で當分遊べると悦びあぐら四方を見廻し「仕組んだ事でも現在の女房を他人の弄物よさせ脇で見て居て辛防しよ自個が心と察して呉るとお富の手を取り引寄せをを富も打えみ奇添ひあぐら慘苦ひ仕事も一生涯速添ふお前の能いやうにと思ふ私しの心中立悪く思つてお呉れでさいよと低語合つゝ兩人が亦何事を爲すやらん物音も無く寂莫たり恚て兩個の兇者の是と始めに多くの者より善らぬ筋の金錢と掠奪る衆口の高くかり遂ひに其年兩人共捕縛と爲つて吟味を受しが未だ命運の盡ざるもや舊惡露顯せざりしゆゑ只筒もさせの罪に坐しお富の江戸の市中と擗られ與三の其罪お富より聊か重しと判決され佐渡の嶋へと流罪されし悪の報ひと知られたり

因みよ曰く當時兩人の兇者が町奉行所より受ふりし宣告書の寫を得られお富女子の

爲めよ左に掲ぐ

横山町無宿

與三郎

廿五才

其方義妻富と申合せ金子術取其上出雲町清兵衛方へ罷越亂防致し段又騙取し金子
の博奕に遣ひ捨し事不届ふ付き佐渡の島へ水かいに遣し遠嶋申付る

與三郎妻

と

み

廿六才

其方義夫與三郎申付どの乍中種々悪行おし金子騙取し段不届ふ付江戸涉捕ひ申
付る

○編者曰ふ蚊屋を釣りたる繪様にせし筆者の蛇足と見給ふべし

○第十回

天網恢々粗にして洩さき富與三郎の兩人夫々所刑と被りしが與三郎の程無く彼地へ

渡航り苦役に従事て従前の悪事と始めて後悔おし同日一所に所刑と受し熊五郎と云兇
者と問が透が故郷の噂さを爲ると悞樂みよ憂き日と茲に經過りしが此熊五郎の乾
兒もありて江戸で有名な悪漢ゆゑ與三郎をバ味方よ語らひ時節を俟つて此島と遁れ去
んと思ひしうバ朝夕親しく交際りて與三の肚裏を引き見るよ是も同じく故郷を慕ふ容
子よ替りが無ければ疾や大丈夫と心と定め或る日竊りよ手段を示し心強くも嚴重なる
嶋役人の監護を忍び嶋と破りて越後の國寺泊りある片山家の寺院よ押入り路用を奪ひ
兩人路程と急ぎつゝ江戸と目的よ走りしが島吏の兩人の逃走爲し打驚き捕亡の人敷
と繰り出し忽ち跡を追ひ懸けて搦捕んと拵めきしうバ兩人の必至の思ひををし立働ら
かんと爲したれ共遠路の疲勞よ身体腦み頼みよ思ふ熊五郎も勢ひ盡て押伏られ再び捕
縛と成りしよぞ連も遁れぬ運命あらんと與三の覺悟を究めつゝ合掌なして千仞の谷へ
檻と斗りよ落入りて悶絶せしが夜中よ到り葉渡の路が仰向きたる顔よ懸りて思はきも
息吹き返し四邊と見るよ追手の者も何地へ行しう更に壹人の影さへ見えねバ我まの命

五十二
 が助りしと悦びあざら立上り道なき道を踏躓えて半月餘り艱難あり中仙道の宮宮ある
 宿稍尽處まで來たりしと精強く勞れしと道の片邊に佇立居て不斗傍らと見返れば
 非人の住家と思へる穢き狐屋と楚と掲げ一人の漢が木の葉と集め煙りと上げて居
 たりしうは幸ひ少遷休息せんと與三の小腰を屈めつと言語と懸けて火と借り受け熱々
 非人の容子と見るよ海松の如くは極き垂し破れ衣よ其身と纏へと紛ふ方無き木更津よ
 てお富と密會あせし時源左衛門へ訴人せし赤間の乾兒見目の三の面貌少しも替らねば
 深く意中よ打驚きしが我が面体の昔しと替り活る姿とあるからに氣の付く事有まじ
 と度胸と定めて尻落付け雑話よよそへて余所あざら非人の素生と聞んと思ひ言葉と設
 けて千般よ賺さるゝとの氣も付せ「僕も現今で此地へ來て立居る適いぬ坐行よ爲り
 往來の人の仁恤よて辛き命ちと繋いで居れと素の上總の木更津よて赤間と云る觀分の
 一二の乾兒と立られし三吉といふ者あるが博奕の科で親分始め彼地と追れ各地と漂泊
 りて暮すうち五体も適いぬ片輪とあり詮方も無き此姿併し今でも親方が折々尋訪て呉



るので偶よの高味酒も呑み臂を枕に起臥する青天井の氣散じり盆正月の苦勞も無く素人衆の知らぬ榮耀と最誇りがよ説き聞ず滑替交りの身の上嘸しと與三も俱々打笑ひ頓て其所とバ立去りしと什麼も此身罪ある連も七十五ヶ所弄斬みし赤間が非道の舉動と肝に銘じて忘れぬに當の敵の源左衛門が此邊り居ると聞き殺して恨みと晴さんと暮ると待ちて最前の小屋の邊りへ窺ひ寄り赤間の來るを待たりけり案下休題源左衛門の女房も富が奸通せしと憤るまゝ與三郎と弄斬し其上は相屋を恐喝して百兩の金と奪ひし事柄が疾く其筋の耳とあり見目の三と諸共長く入牢の身と成しと僥倖よしと生命と助かり馴し故郷と退れしと巴些の知音と心的は太宮宿へ足と留め賭博の群に入たりしと乾兒の三が坐行も成りしと兇者なら不便と思ひ打節小屋へ尋訪て行き互ひも昔しの雑話として慰さむ事も間々有しと今宵も博奕の勝利と得し其悦びと兼て又久しく問ぬ贈物よと自ら提し一升樽の酒と土産も入來り寐て居る三と搖起し心置き無く兩人が打寛ろさて酒盛りせしと是彼共太く酔ひ其儘其所へ打臥したる始終と篤と

見濟して小蔭と出る與三郎の赤間が身邊に差置たる脇差靜然引寄つ刀莖檢めて打點頭死人も等しき兩人の首打落し莞爾と打笑み是も少し胸晴りと彼脇差と其所へ置き去んとせしと往先も兪敵國も事あらぬ身の要心も屈竟ある此脇差と捨置く甲斐無き事と思ひしかば腰に携帶再び亦源左衛門の懐中へ手と差入て窺ふも員數の幾らか知らぬ共手對爲せし一ト包と財布の儘に押頂き是とも取つて足疾や道と急ぎて其翌日江戸へ入しと兩親の顔も流石も愛執しく表面も逢れきともせめて生れし我家の前と通りて往んと思ひ數面前後と見廻し横山町まで來りしとき脊後の方より我名を呼れ疵持つ足の與三郎思へき後邊を見顧りたり

○第十一回

呼留められて與三郎の驚きあがら振返り誰かを見れば我家へ年來出入る大工も長左衛門と云ふ者あるにぞ能機ひと進み寄り詞と懸んと爲る處を長左衛門の手と以て制し爰へ往來人目も有れば先づ此方へと横町の淋しき處へ伴ひつと偕與三郎が什麼もして

此近傍を彷徨居るぞと知らぬ顔して諮問しかば與三も今更包み兼鳥を破つて越後へ出
 夫より夥多の辛苦に逢ひ遺恨重なる者共を殺害あして宿志と遂げ最早年貢の收めを
 自ら名乗つて深く所刑と受んと故郷へ歸つて來るを幸ひに苦勞と懸し兩親へ一世告別
 に余所をぐら一ト目途んと肝太くも尋訪て來たとの長譯に長左衛門の涙と拂ひ其心
 が三年先にお着きおされと事あらば斯ふしと歎状の有りますまい併し今でハ歸らぬ縁
 り言御痛のしきハ御兩親が尊公の事を云ひ出て泣て斗りござるのハ此長左衛門も存じ
 て居れハ逢せて上さい物あれ共鳴と破つと事柄が疾くに公議へ聞えて居て手先の衆
 千般に休を扮且し近江屋のお家の様子と親ひ居れハ愁ひ尊公が御兩親もお逢ひござる
 と其時の悦び却て哀しみの種とあるのハ必定ゆる只何事も前世の約束事と歸らめて悪
 事の念とさらりと止め公議のお手に懸らぬうち名乗つて出るが上分別情あいやうだが
 此親父ハ曲つと事を申しませぬから能く御了簡遊バハませと骨身ハ答ゆる強意見に與
 三も涙と拭きさぐら昔しに替らぬ其方の親切忘れハ措ぬ忝じけあいが今も今迎云ふ如

翌日の朝ハ此方から名乗て出る了簡あれハ折と見合せ兩親へ其方ハ能く取繕ひ嘸し
 て吳よ去バとて暇乞する與三郎と長左衛門ハ引留て道が利發の若旦那能く心定ま
 りましと然あれ是程潔く決心おされてござるのと翌日とも俟せ今宵の裡ハ何云ふ事
 り耳もあり若し間違ひが有りましたハ自訴する覺悟も水の泡恠れハ今夜ハ大事の瀬戸
 無心な家へ宿泊らふより一層近頃大江戸よて噂のHigher俠客品川宿ハ住居と爲る觀音
 久次と云ふ者へ事由を打明け一ト夜さの宿りとお頼みおされたらハ先方も有名の俠
 客よもや否やハ有ますまいから然ふ成されたら宜しからふと何から何迄抜目無き長左
 衛門が親切を悦び受けて與三郎ハ名残り惜しくも立別れ品川指して赴きけり話説分
 頭爰ハ其頃品川宿ハ多くの乾兒と手ハ付て觀音久次と呼ばれたる人ハ知られし俠客あり
 しガ元來ハ不良の輩よて或る藥屋へ忍び入り朝鮮産の人參と奪ひし事ハ露顯よ及び
 捕縛と成つて圍圍ハ在りしガ深く悪事と後悔して脇目も觸らぬ一心ハ普門品とハ讀誦
 かし圍圍の規定と遵守しガ慮らぬ大赦の時節ハ逢ひ沙婆へ出たる其以降ハ自ら心と誠

しめて弱きと助け強きと挫き専ら人と救ひしかば誰云ふと無く観音久次と異名と人よ
 呼るゝまで名高き侠客も成りたりしが什座ある縁でか興三郎と二世と契ひし彼も富が
 江戸の市中と搦はれて品川宿の或る方へ食客で居た時語らひより早晚夫あり夫婦とあ
 り最睦間しく日と経過しが或夜久次へ富も向ひ其方が以前の良人で在つと彼近江屋
 の興三郎の段々悪事功が嵩み嶋と破つて中仙道の大宮宿まで二三人々と斬害で其儘
 る此地へ逃げ込み来りしとして今朝其筋から夫々へ召捕り方の達しが有たが水の流れと
 人の身の上何成り行り分らぬもの併し以前の賭奕の賭場で二三度逢ふ事もある万皿
 知らぬ交際でも無れば若し此方へでも来たあらば及をせあがら隠匿して遣り度ものだ
 と親切ある夫が俠氣の詞と聞か富の最毒の毒さうよ妾も今でいゝ前の女房以前の良夫
 へ塵程も未練を心の残りませんが立派な身分の生息子と兇状持よ爲したのも云は妾が
 激へと同前夫と思へば他人の様に知らぬ顔も出来すまいと夫婦が秘語囁く折節表
 面の格子とはとく敵き些無禮な事あがら此近邊で名高い久親分のお家へ尋ねて行く

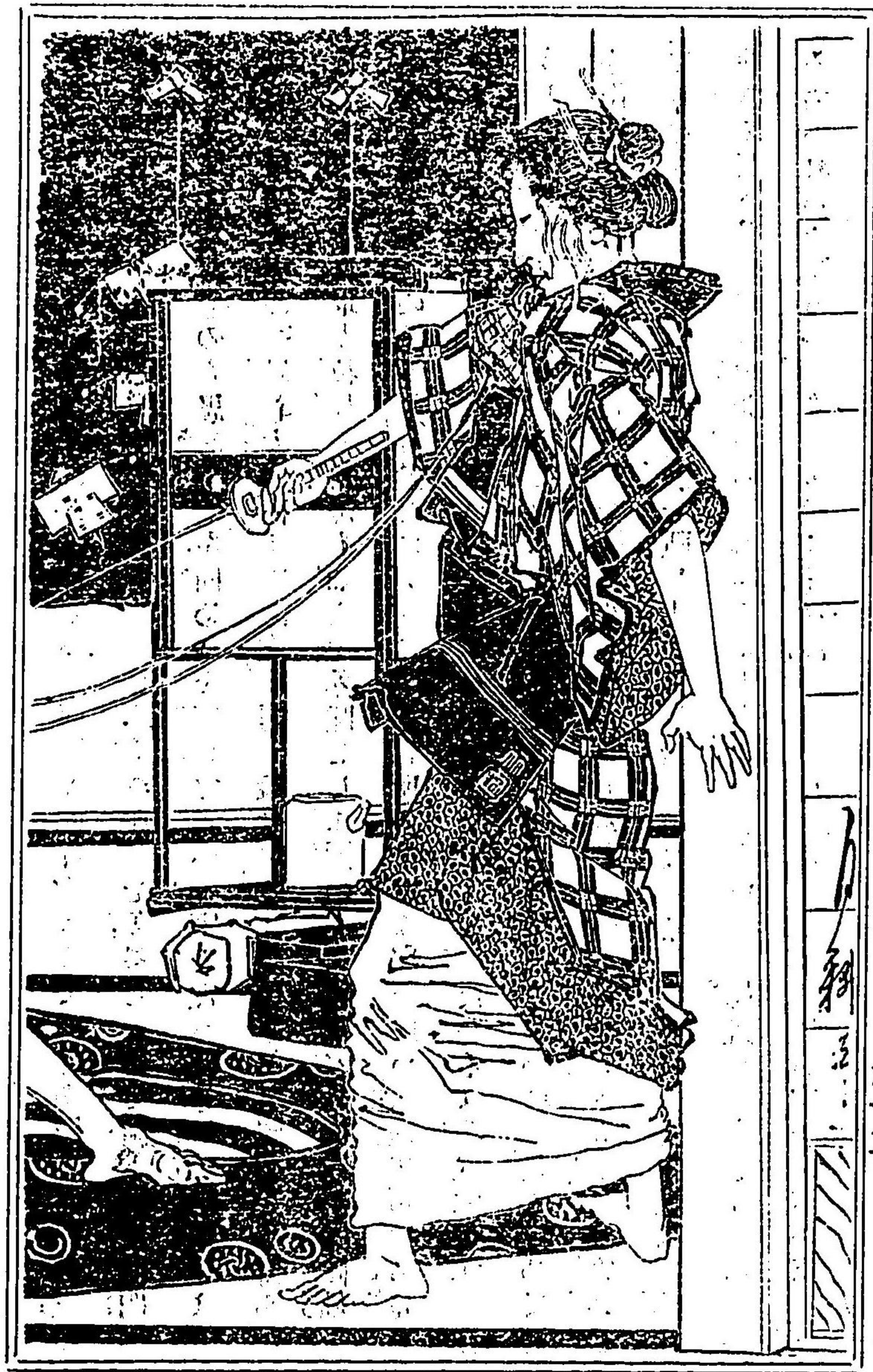
者あるが暗さの暗し所が無く寢よ困却て居りますすが何か教へて下さいましと案内言
 葉を久次の聞き何處から尋ねてござつたか久次と云ふの不佞が事夜更けも厭ひ来ら
 れしに急ぎの用でも有つての事り名前何と仰有りますと云はれて悦ぶ興三郎猶も聲を
 ば秘語つゝ名前某と明さを共お目隠れは知れませ故親分爰の戸口をばと云ふに
 必定自個と見懸け逃げ込んで来し者ある可しと久次の疾くも悟りしかばお富に命令格
 子と明させ誘と斗りに差出すお富が執りし手燭の火影に兩個の顔と見合せて互ひに驚
 愕暫時の物とも言や忙然たり

○第十二回

興三が尋訪て来たど聞き久次も一度の驚きしが最前お富と囁きし事さへ有は去氣無く
 興へ通して口誼を述べお富が現時の身の上とも少しも包蔵を物語りマア當分の我家よ
 居て旅の勞れと治すが能いと思ひの外なる親切に興三郎の打悦び佐渡と破つて逃出し
 中仙道の太宮にて赤間と三の兩人に慮らぬ出逢ひ斬害せし夫等の始末と久次に話説し

迎も遊れぬ身の罪科翌日の自ら名乗つて出て公議の御法に従ふ積りと云ふに久次も心
と察し我が女房を爲て居れども富も云々野合にて舊の情夫と手も切ねば定めて
何等の情話も有ふと粹と通して何事とか思ひ出せし様は爲て驟かに富は打向ひ今迄
皆無忘失て居たが過刻絞津の善右衛門より是非共今宵来て呉ると翌日まで延せぬ急用
と承諾して居て此儘に一晩捨てて居れば故是から寸刻彼所へ行き殊に寄つたら宿泊て來
るから此客人に籠末の無い様随分ともに勤つて上るが善いと云ひながら與三は件々の
事由と告げ何處とも無く立出行きしに兩個が意中と酌み取りし久次が仁恤と知られた
り沿て富と與三郎は久しぶりある差向ひ四邊に遠慮も在ざれば互ひに分れし其以降
の雑話に其夜も強く更け疾や深更に成りしかば富は一室に臥房を設け與三を臥さし
め火鉢に對ひ夫の歸りと俟ちながら獨り熟々思案と爲すに自個が昔し木更津にて赤間
爲めに海に入り辛き生命と助りしも原と推考せば與三郎と忍び逢ひたる各にして赤間
に遺恨の少しも無し強惡非道の與三郎は此身と任せ是迄は數多の辛苦と重ねし我が

過誤と思ふよつけ頻りよ昔日が戀しくあり與三は此程大家にて源左衛門と見目の三の
兩個と手も懸殺せしと聞て殊更愛情が尽せめては與三と差殺し恩義と請と源左衛門へ
身の謝罪は爲んものと思案の臍を固めつゝ寢息と考へ一室の裡へ抜き足指足窺ひより
與三の身邊へ引寄せ置し大宮宿にて源左衛門と殺せし時を奪ひ來し其脇差とも知らず
して富の手に取り抜放ち前後も知らず熟睡せし布團の上へ踞踏り南無阿彌陀佛と
唱へも敢て與三の胸元拳も通れどグサと突く急所の重疵は與三郎の跋返す可き力量も
無く脆くも息の絶しりば富の微笑懐中せし財布と引出し檢たむるよ我が木更津は在
りし時下着の切の餘りと以て自ら縫て贈りたる赤間が所持せし品を是も定めて源
左衛門が肌身は付て居たりしと盗み來りし物あらんと思へば最悪さも増し切害爲し
と悦びあぐら偕如何して死骸と隠し夫の前体と辨解はんと退きの毒婦も工風は案倦腕
拱きて居りしが日頃此家の食客ある重しと一若漢の元來愚鈍を質あるよ色好みあ
る者なれば富が艶麗ある姿色は迷ひ澤の然の身と焦し戀慕ひ居る容子とば富も疾



くより察して居れば是と手練に引付て死骸と隠すも勝す事無しと分別忽ち定まりしか
 古き葛籠へ死骸を収め四邊を奇麗に掃清め是よて氣支ふ事無しと表二階の階子と上
 り重太の臥房へ搜り寄り物とも云き揺起すも重太の驚き起上り寐惚し聲と振立て誰だ
 くと訝ると富の打笑み身と摺寄せ「今夜の急の用が出来今方親方が鯨津へ往き壹
 人で寐て居て淋しいら否でも有らふが布團の端へ妾を寐かして呉よと云れて重太
 の胸打騒ぎ恐悚歡悦がとくと震へる手先も富と引寄せ其儘其所へ轉寐の如何ある
 夢や結びけん少遷有て富の起き出「今も和郎よ云ふ如く斯ふした交情もあるうら
 此家に虚心く足を止め見付けられお諸共に生命を捨ねば成らぬ故る前の詞に塵程
 も嘘が無れば妾を連れ何處へありと立退きて夫婦に成つてお呉であいうと飽く迄富
 も賺さるゝと心の付ぬ重太の悦び「姉どが然云心あら是より直ぐは此家と落ち目黒に
 少しの知音が在れば是に便りて今宵と明し翌日の何とも談合して行末長く添遷る工風
 の何等も有りませうと云ふを得たりと最前の死骸を隠せし葛籠と衣袋調度を入置

きたりと体無く欺き重太も脊負せ什麼も深更と云ひあがら怪しまれての不都合あれバ
 成りたけ人の通らぬ道と行くのが却て大丈夫とお富が詞は重太の點頭案内知つたる八
 ツ山の裾と旋りて目黒の方へ兩個手も手と鶏が鳴く曉懸けて落行きけり

第十三回

外面女菩薩内心女夜叉と寢るるお彼富の姿の花の艶あるも引換え殘忍無慚の心と
 起し與三郎をバ切害して赤間の警と復せしと思ひながらも現在の夫久次が意中と汲み
 兼ね兎角死骸と片付けて素知らぬ振りとする如きと色も事托せ重太と欺き葛籠と
 脊負せ目黒の方へ兩個諸共馳せ走りしが富の重太を呼び止め「餘りよ道と急ぎし故
 か咽喉が乾きて堪え難けれと幸ひ茲の井の水を一口呑せてお呉であいうと息と切り
 つゝ依頼もよぞ重太の應て脊負たる葛籠を下してお富と憩いせ手拭取出し汗拭きあが
 ら「僕も無闇も急いだので息が切んで堪らぬうら一ト釣々て上ませうと何の氣も無
 く井に立寄り釣り上やうと爲る處とお富の双手も力量と入れ重太の脚を救ひ上げ「是

何すると言せも敢て楯と斗りに突き入れて莞爾と笑ひ立上り與三の死骸と入れ置たる藁籠と其所へ捨置て仕合善しと打悦び我家と指して歸りしに不敵ありける事共なり
 諸も久次ハ兩人の意中と察して其坐を外し懸意の者の家へ行き一宿あして其翌日巳の刻ころよ我家へ歸り與三の容子を尋問るに富の然有らぬ面持して夕邊もお前に話し
 通り今朝其筋へ名乗つて出るとお前へ呉々禮と述べ勇み進んで立出たりと云ふよ
 久次ハ打點頭「恁哉自ら名乗て出るとも死罪ハ遁れぬ身の兇狀一夜ありとも宿貸して寛と休息爲せとのハ功德で有つたと云ひあがら手拭ひ片手に表へ出我が馴染の風呂屋の門を入んと爲し將近所の者が久次よ向ひ挨拶して取慌しく懸け行くを久次の訝り袖引留め變事でも有ましたらと云れて漢ハ振替り否僕とても深くハ知らぬと身み都て古疵だらけの若漢ガ斬害れ藁籠に入て八ツ山下の大塵溜の側よ捨て有つたと今朝方見出し現時御檢使の役人ガ彼處へ來たどの衆口ゆゑ見行きりと云ひ捨て疾くも見え成りしうバ久次の不審晴やらぞ今の漢ガ詞の端々古疵だらけと云ふのガ心



よ悪れバ風呂よも入らき直ぐに其儘彼男の跡と暮ひて赴きしに老若男女の分ち無く如
 輪と四邊と取巻たる見物人と押分けつゝ死骸の見邊に立寄つて能々見れば思ふ違
 せ崎昔我家へ一泊せたる與三郎にて有しうバ愕然として驚きしが人に云ふ可き事
 ねバ忽ち其場と立去りて我家の方へ五拾歩斗り立戻りたる道邊の井戸の側りへ茲にも
 又夥多の見物立集ひ何事やらん雖然と罵り騒ぐ光景に愈々胸のみ打騒ぎ久次ハ筋か
 差覗けば紛ふ方驚き乾兒の重太が只今井戸より引揚げられしう總身膨脹二目とも見ら
 れぬ姿よ再恐愕流石刺客と尊敬らるゝ久次も意外の珍事よて思案又確と切迫しかバ
 富を篤と穿議して此手懸りを捜らんと我家へ歸り去り氣無くお富は向ひ與三郎の立出
 たりし模様を諮問重太が今朝から見えぬの何した事由だと質問よお富ハ畏たる色も
 無く與三が此家を立出した今がたお前又話した通り重太が今朝より見えぬの妾ハ今
 まで知らあんだと答へる而已にて是と云ふ手懸りさへも有ざれどお富の素振り何と
 無く怪しく見ゆれば與三郎と殺せし者ハお富と稍や心中に疑惑と起せど何故有て乾

兒の重太が井戸へ陥入り相果しう是のみ少しも推的ハ無ければ恠る毒婦は運添ひ居ら
 せ我が行末も危ふしとお富と厭ふ心よあり夫婦の愛も消失て空恐ろしく思ひしかバせ
 めて夫の我口から公議へ訴へ尋常よお細と受けさせ是迄に作つゝ罪を亡しあバ後世の
 苦患も薄かる可しと覺悟定めて我家をいで南の番所へ赴むきけり案下休題横山町の近
 江屋方へ出入と爲る大工の棟梁長左衛門ハ慮らせ與三よ出合ひて鳴を破りし悪事の始
 末を後悔なして名乗て出公議の裁許と受ると云殊勝を覺悟を祈しうバ不便と思ひ品川
 の久次方へ落し遣り直ぐ其脚よて九右衛門方よ來つて件んの始終を告げ「思ふよ増
 して若旦那の覺悟の体の勇ましきよ御心根も推慮られ一沙哀れよ存じますれば今宵筋
 りよ彼所へ往き逢ふて上てハ下さらぬかと最親切ある長左衛門が詞に夫婦ハ顔見合せ
 少遷涙よ昏たりしが町人ぢがら九右衛門ハ分別の有る男ゆゑ「假令我兒が尋ねて來て
 り公議の御法と破りし曲者逢ふ可き道理ハ少しも無く況てや我から音信て面會杯どハ
 思ひも寄らせと確平云へぞ母親ハ年來戀しき與三郎が此世の別れに只一ト目何ぞ逢し

て下されと泣嚙なみされて九右衛門くさむねも恩愛痴情おんあいちじやうの遣やる方かた無く漸やがくにして免許めんじゆせしうう其翌あした
 日未明ひみあきも起出おきいでて大師詣だいしよぎと云いひ觸ふし長左衛門ちやうざゑもんと召連めしつれて品川宿しんがはじゆくへ赴おもむきしう急いそぐと爲なれど
 老おひの足思あしあはひの外ほかは日ひの闕たはて四半頃よつはんごころよりちりしう若もし手後てあれに成なりもや爲なんど胸むねも動う騒う久く
 次つぎが門かどへ來きたると其儘そのま長左衛門ちやうざゑもんの格子かうしの外そとから聲こゑを懸かけ「は免めんをされと案内わそのよは應おと答たへ
 てお富とみの立出たいでで何處どこから出いでなされと云いふよ此方こなたの打微笑うちほゑ横山町よこやまぢやうより參まゐりしと四邊あち
 り見廻みまはし格子かうしの内うちへ兩人りふたにん共とも入いり

第十四回

お富とみの兩個ふたりにが素振そぶりと云いひ横山町よこやまぢやうより來きたりしと云いふよ儲たくらへと思おもへ共色ともいろも見みせせ訝いげよ
 「横山町よこやまぢやうと仰おほ有あり何方どこの事こと存ぞんじませぬが生憎あなはく主個あるじも居ゐり合あはさねう再回またぞろお出いで下くださいま
 せと情無なさく言いふと長左衛門ちやうざゑもんの我々われわれ兩個ふたりにを怪あやしんで斯かく言いふ物ものうと思おもひしう猶なほも詞ことばと
 低語ひそめつう「私共わたくしどもの近江屋あゝみやの家族かきの者ものよて露程つゆはかも案あんじ成なるう者ものあらねう何卒なにぞよ夕邊ゆふへ此
 お家うちへ一夜ひとよの宿泊やどりを依頼たのまへ仁おにへ逢あはせて下くださる可べしと只管ひたすらたのも長左衛門ちやうざゑもんが言葉ことばと



富の聞答め「然ふ仰有と何とやら人でも隠して有る様あれと手前の家への別段は泊り合せし者も無く殊更昨夜の主個と始め家族不在に爲まし故何方が尋ねてお出な成ても取次者も居りませねバ門違ひでございませぬかと眞顔に成て應答にぞ長左衛門も母親も頼みの綱の切れ果て詮術無ければ能程は挨拶をして表へ出最本意をげに兩人が元來し道へ立戻り只有る茶店に腰打懸け長左衛門の面無げに「取留もせぬ事柄と能も思ひでお供とあし却て尊婦にお歎きと増せて何共濟みませぬが久次の家内が口上に聊ら疑ふ處も有バ自個の是より引返し再び逢ふて若旦那の安否と尋ねお跡から追付け貴店へ立歸れば貴嬢の一旦横山町へお戻り成れて吉左右とお俟成さるが宜しからふと云に老母の點頭つゝ「何分共に能やうに何頼ましたと立上れば長左衛門の此茶屋の主個は頼んで返所から駕籠と壹挺拵へさせ老母と乗しめ横山町へ返して自個の觀音久次の家の返邊りに赴むく折柄八ッ山下の死骸の噂さに物思ふ身の何と無く心に懸れば今し方檢使も濟て取置に爲つたとわれバ探る可き手段も無しと思ひしかバ愈々お富に再

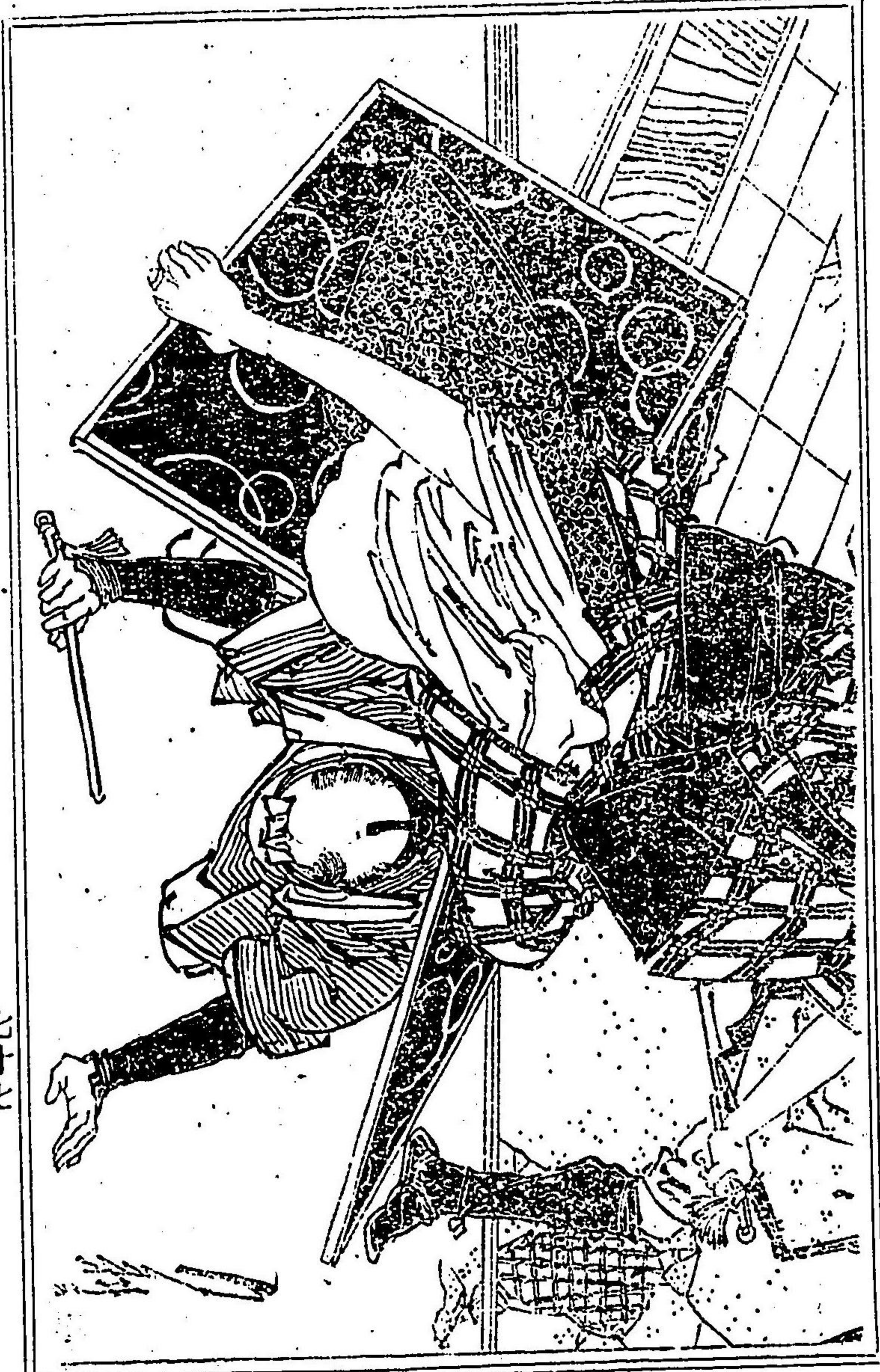
回逢ひ篤と實否と糺さんと彼是爲て居る其處へ觀音久次が先立ち手先と思しき四五人と同道をして立歸り何う頻り又囁き示し各々小蔭へ忍ませて久次が壹人我家に入り「お富の居るか」と云ふ聲は應と答へて出んと爲るお富の手を取觀音久次の故意と四邊りよ心を配り一段聲を打低語め「斯ふ出し抜は話説たら仰天爲るう知らまいが和女が是迄覺えの有る悪事の數件は逸々よ自個が口から云を共知れと事ゆゑ古めかしく云つて聞する迄でも無いが先づ差當る夕べの事悪人あがら與三郎が其身の罪を後悔して自訴爲る心哀と聞ふゆゑお主の兎も有れ此自個の何んの由縁も内密の情話で澤山も有ふと思ひ一夜の宿と許しと上我家を外して立出との夫と云ねを兩個へ寸志自個が仁情と表裏あるお主の發狂たのう什麼は悪黨おれバどて舊の情夫と殺すとの兎ども蛇とも世の中は比喩品無き大悪人自個も昔の相應は善らぬ事も働いたが現今での質朴を一本生義理と情の二途より外へ曲らぬ根生は念佛三昧日る經過る觀音と云ふ肩書を人よ呼れし此久次の顔とお主の潰しとナアと遺恨の餘りはらくと落と涙は丈夫の眞實

の實ももと知られたり富の取れし手と掻き拂ひ一思ひ懸け無きる前の疑ひ木更津き
つて彼人どの淨名の立た兩個が交際何んば世間を横櫛は渡つと妾が果だどて未だ夫程
か心よの眞の事たり毛筋ほご身も覺へ無き濡衣を私しよ着せるる前の了簡愛情の尽
事でもあつて別れたいよの是と云罪が無いゆゑ難辨付け妾しと離別氣よる成りの今
朝も前へ云ふたる通り呉々禮と云置て歸つて往く彼人と殺しと杯どの思ひも付ぬと
柳眉と逆立て云争ふと久次の片頬は冷笑ひ驚と鳥と云ひ抜ても迎も川ぬ天の網お公
議へ御苦勞懸んより自個が口から訴へ出る細と受させ差出さば少しの罪科も薄らぐだ
らうと疾又自訴して置たから推付け茲へ捕亡が向られたから潔く細と受よと夫の
詞は偕の事皆露顯して我身の上も成りしと山色忽ち悪鬼の如く一室と目懸け駭け
入しが幸ひ夕べ與三郎が携へ來りし脇差の赤間が所持爲し名刀おれば手も取り上げて
抜き放ち夫婦の縁も今日限り能も態々訴へ出罪は陥せし觀音久次恨みの又覺へよと瀧
矢と吹ると飛退り久次の外面は打向ひ「ソレ各員と云ふより早く豫て小蔭へ立忍びし

手先の者の手勝ちよ躍り入らんと悔めけども富が刃と差附し寄らば切んと俟拂へる
に進み兼さる一同の只譯も無く器々と罵り駭きて悶着するを滑ての果じと壹人の漢が
緋房の十手振閃かし取つたと云ひつゝ近付をお富の左右に身を轉し空と打せて脇差と
横に拂へば彼漢の兩脚破落利と斬り殞され二言と云を轉伏たるよ是れと驚く捕亡の面
々輕蔑難しと思ひけり

○第十五回

勢ひ込んで立向ひし捕亡の者も思ひの外あるお富が手練に舌を巻きつゝ控へて居りし
が若し手に餘り取逃さば役目の不注意と氣を勵まし各々聲を合せつゝ呀叫て打懸る
に觀音久次の最前より片邊に在つて窺ひ居りしが捕亡の者と殺させて罪科を増さば一
片の我が慈悲心も水の泡疾や是迄と思ひけん一息吐て佇立たるお富の弱腰丁と執り力
らよ任して捻伏ると得たりや應と捕亡の面々無念々と齒嚙と爲すお富が上に折重り細
打懸け久次に涉川の次第も有バ續いて直ぐは跡より來よと最嚴かに差示し外面の方へ



立出て南みと指して引立行く此時恰好長左衛門の此騒動を見聞して事由の確との分らぬを舊の情夫と切害せし罪科は依つて召捕られし久次が妻の其昔し富と言ひし毒婦で在りしと近所の者の取沙汰を聞て再び打驚き偕の平日噂さよ聞くる富が今の観音久次の女房も成つて居る處へ昨夕慮らき若旦那が尋ねてござつた其爲に殺す心も成つたのか原の起因の長左衛門が殺へて越した久次が家夫から事が起つての自個が手親ら導ひいて殺したのも同様ありと正直一途の長左衛門の倒つ横山町の近江屋方へ馳け戻り目撃せし儘物語るよ悪ひ奴との思へ共血肉と分た我兒の枉死殊に斬害た常人の我兒が深く言替せし富と聞て猶更よ悲歎の涙に兩袖も朽る斗りに打泣しが富が所刑と受し頃養子を貰ひて家督と譲り夫婦の頭と剃髪め鹽場詣り立出しとぞ是の之れ後日の譚しあり浩て富の手先の者に圍繞せられて月當ある當時聞えし名奉行大岡侯の白洲へ引れ敷度拷問と愛けたれ共存せぬ知らぬと云ひ張つて一向罪に伏さぬ大岡公の手と配られ久次が家より取寄せ置れし證據に上りし脇差と赤染みたる財布の二

品も富が目先にさし付けられさしもの毒婦も差俯くと大岡公の富も向ひれ「軟弱き女の身と以て兇奸不敵の情夫と害す並々ならぬ其方かれバ斯くあるから速かに我身の罪科と白狀して公議の御法を受け可きに其所へ心の付ぬの公議と掠めて我一人生命と助かる所存で有る悪と働らつ了簡に些不似合ある未練の心底と笑ひ給へバ俯向き居りしか富の頭と漸く擡げ「水火の責苦と受るとも白狀せまじと豫てより覺悟極めて居りましたが未練者とのみ諭しよて無明の夢も醒めましたれば包まき中上ますと是より自個が木更津にて藝妓稼ぎと致せし時源左衛門に思ひれて遂ひに夫婦となりしより慮らき與三も出逢て密通爲しと見付られ海へ飛び入り一旦の氣絶爲しと親舟へ助け乗せられ故郷へ歸りし後ち大松屋の傳兵衛と云ふ伴頭も深く思ひれ堀江町の家に住居て在し頃別れ程經し與三郎に廻り逢ひしを其儘に又も忍んで逢引せしと吉五郎と云ふ悪者に訴人せられて彼所と追へれ同朋町に借家を構へ色も托して黄金と掠奪稻閑堀にて吉五郎を與三と兩人で切害せしが幸ひにして顯はれき公議の御手も罹りし時

も只筒持せの汚仕置うけ江戸の市中とみ構ひと成りしに余義無く品川宿の知音と便り
居りしうち今の久次と夫婦になり交情睦間敷経過しに昨夜慮らぬ與三郎が尋ね來りし
物語りに鳥と破つて逃げ出し中仙道の大宮宿まで源左衛門と乾兒の者と殺して其身の
遺恨と晴し最早此世も残るべき思ひも無れば深く名乗て出ると聞しより彼が赤間も
受たる疵も自ら索めし罪業あると却て赤間と讎として討しの道理に在きと思ひ不斗殺
す氣も成りましたれば赤間と殺めて携へ來し又と以て差殺し死骸と隠すに詮術盡て乾
兒の重太と欺き賺し死骸を隠せし葛籠を脊負せ八ツ山下の井の底へ沈めし事まで事洩
もなく一部始終と白状爲れど我身も罪と引受けて久次が事も長左衛門が與三を尋ねて
來りし事も少しも言ねば後々迄知る者絶えて無りしとぞ浩てお富が白状にて年來の舊
悪悉く露顯に及びしかば口書爪印も相濟み幾程も無く江戸中引廻しの上鈴ヶ森に於て
磔も行へる旨仰渡され既に其日とも成りければお富の白羽二重の友類に黒縷子五寸
巾の帯と前まで結び切にノ首に水晶の珠數と懸け目と閉じ馬も乗り行くさま天然美麗

の婦人されば見物の老若も思はず涙と浮めしがお富の刑場に到りし時
三味線の三筋も糸も渡り來て今も浮世と歸るひと筋
と一首の辭世と残し鎗七本まで遂に冥目及びしに實も還ま敷女あり儲久次其外の者
よの格別のお咎めも無く皆々放免もありしうら久次の後年頭と剃り兩人の菩提と吊ひ
て七拾余年の天壽を保ち大往生と遂げたりとぞ

因よ曰一説もお富の與三郎が我家へ尋ね來り暫く逗留中殺意と起して欺き殺せしと
乾兒重太も見認められ残念と思ひし儘是とも欺き井戸へ沈落しとも云ひ諸説區々よし
て未だ正確さぞ知らず

又重櫛名士傳と云ふ書も町奉行の宣告書と記載されの参考の爲め左に記す
芝七軒町 無宿

其方義先年夫與三郎と申合せ術事致し江戸構ひ申付るよ其後舊惡と改め此度夫與三郎嶋抜け致しゆと隠し置のみあらや與三郎所持の金子よ心變り夫たる與三郎切害致し處久次子分重太に見咎められ殘念に思ひ井戸へ押入殺しし段重々不届至極よ付町中引廻しの上品川鈴ヶ森よ於て磔よ行ふ難有存可し

横山町 無宿

與三郎

其方義先年佐渡島へ遠嶋申付しよ熊五郎と申合せ嶋抜け致し無宿熊五郎の越後寺泊よて召捕罪科よ行ひしと與三郎の其場と逃去ゆよ付嚴重は尋有之處以前の妻富方よ隠れ居り其内富變心致し切害致しゆよ付富の罪科申付與三郎存命にゆい町中引廻しの上獄門よ行ふべき者也

世者情淨名横櫛終

明治十七年八月十一日御届

同 年十月 出版

同 十九年六月十二日別製本御届

同 年七月 出版

定價金四拾錢

東京京橋區銀座二丁目六番地

千葉茂三郎

編輯兼出版人

東京京橋區銀座二丁目六番地

稗史出版共隆社

發兌所

東京書林會社中

大販賣所

各地方書肆繪雙紙店

賣捌所

稗史出版書目

柳亭種彦撰 尾形月耕畫

○復讐浮木龜山 繪入上下二冊 定價七十五錢

恒酒舍雅山著 尾形月耕畫

○世者情浮名横櫛 繪入全一冊 定價金三十錢

柳亭種彦撰 望齋秀月畫

○春色黃金花 繪入全一冊 定價金三十錢

柳亭種彦著 朝霞樓芳巖畫

○朝顔垣殘秋月 繪入上下二冊 定價金五十錢

恒酒舍雅山著 尾形月耕畫

○自來也物語 繪入上下二冊 定價金五十錢

柳亭種彦著 吹川國梅畫

○花兒響片腕 繪入全一冊 定價金廿五錢

曲亭馬琴著 尾形月耕畫

○淺間三國一夜物語 繪入上下二冊 定價金五十錢

爲永春江閑 稻野年恒畫

○美談梅雨の松風 繪入全一冊 定價金三十錢

栗杖亭鬼卵著 稻野年恒畫

○長者黃鳥の墳 繪入上下二冊 定價五十錢

柳條亭花彦著 大蘇芳年畫

○敷島の橘 繪入全一冊 定價金五十錢

恒酒舍雅山著 尾形月耕畫

○實說名畫血達磨 繪入上下二冊 定價四十錢

元祖柳亭種彦著 尾形月耕畫

○緞手摺昔木偶 繪入上下二冊 定價五十錢

柳亭種彦著作 尾形月耕畫

○名器之茶入 繪入上下二冊 定價四十錢

○名妓之古跡 女夫鬚操競

○式亭三馬編述 尾形月耕畫 繪入上下二冊 定價金五十錢

○大津吃又平名畫山刃 繪入上下二冊 定價金五十錢

